

# 護、衛、艦ノ話

あゝ無情……

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

とりあえず、なんとなく書いてみました。

もう一個の小説の方はちよつと行き詰まっているので、息抜きに書きました。連載はするかどうか分かりません。

元「なんとなく書いてみたく艦これ編」

# 目次

設定	1
改装案	5
ここから始まるリズムに合わせて	
1話	7
2話	19
3話	28
4話	42
5話	52
6話	63
7話	76
8話	86

## 設定

### 主人公達の設定

しらね (兄)

しらね型護衛艦一番艦『しらね』

性能諸元

・機関

石川島播磨FWD2 2胴水管型缶・2缶

石川島播磨2胴衝動型蒸気タービン (35000ps) ・2基

スクリュープロペラ・2軸

・速力・32ノット以上

・兵装

73式54口径5インチ単装速射砲・2門

MK・15 高性能20mm機関砲 (CIWS) ・2基

GLS―3・1基

74式アスロツク8連装発射機・1基

68式3連装短魚雷発射管HOS―301・2基

哨戒ヘリコプター SH―60J (後にSH―60Kになる予定)  
?3

(電子機器類等は省略)

・艤装説明

しらねの艤装は右側に船首を模した艤装、背中部分に艦橋を模した

艦装（今後は『艦橋艦装』と表記）、左側に船尾を模した艦装でできている。

右側の艦装にはCIWS、その後ろに73式アスロック8連発射機が搭載されている。艦橋艦装は電子機器類はそのままマストに付いていて、形は実際の艦橋部分を模している。左側の艦装にはヘリ格納庫があり、その上にGMLS-3シースパロー8連発射機が搭載されている。その、格納庫の外側にCIWSが付いている。73式54口径5インチ単装速射砲は両肩上にイメージとしては伊勢型戦艦娘のような感じで搭載されている。68式3連装短魚雷発射管は太ももに搭載。

服装は海上自衛隊幹部自衛官の冬服をコート風にアレンジしたものを着用。（夏は暑そうである）

身長は159cm。／――（。ロ。）（こ）重要！

・性格etc……

ボケ役かツツコミ役かと聞かれるとツツコミ役。元々状況判断能力は高いため、適応能力が高い。（そのため、襲撃された時も冷静だった。）艦これの世界に来る前は高校生で、優しかったためよく後輩に慕われていた。ちなみにオタクである。

艦装イメージ

はたかぜ（弟）

はたかぜ型護衛艦一番艦『はたかぜ』

・性能諸元

・機関 COGGA方式 TM3Bガスタービンエンジン(22, 500 shp)・2基

S M 1 A ガスタービンエンジン (13, 500 s h p) ・ 2 基  
推進器 ・ 2 軸

・ 速度 ・ 最大 30 ヲト  
・ 兵装

7 3 式 5 4 口径 5 インチ 単装 速射 砲 ・ 2 基

高性能 20 m m 機関 砲 (C I W S) ・ 2 基

M K ・ 13 m o d ・ 4 単装 ミサイル 発射 機 (S M - 1 M R S  
A M 用) 1 基

ハープーン S S M 4 連装 発射 筒 ・ 2 基

7 4 式 8 連装 アスロ ヲク 発射 機 ・ 1 基

6 8 式 3 連装 短魚 雷 発射 管 ・ 2 基

艦載 機 ・ ヘリコプター 甲板 のみ

(電子 機器 類 等 は 省略)

#### ・ 艦装 説明

形 は しらね と ほぼ 同じ で、右 側 の 艦装 に 順 に C I W S、M K ・ 13  
m o d ・ 4 単装 ミサイル 発射 機、7 4 式 8 連装 アスロ ヲク 発射 機  
が 搭載 さ れ て いる。左 側 に 艦装 は な く、ヘリ 甲板 は 艦橋 艦装 の 左 側 に  
折 り た た ま れ て いる。ハープーン 発射 機 は 艦橋 艦装 の 後ろ に 並 ん で  
配置 さ れ て いる。7 3 式 5 4 口径 5 インチ 単装 速射 砲 は 長良 型 三番  
艦 と 同じ よう な 形 で 両手 に 持っ て いる。(負い 紐 が つい て いる の で 使  
わ ない 時 は 背負 え る。)もう 一 個 の C I W S は 左 側 に 艦橋 艦装 から 伸  
び て いる アーム の 先 に つい て いる。6 8 式 3 連装 短魚 雷 発射 管 は 足  
首 に 搭載。服装 は 常用 第一 種 夏 服 海士 を 半袖 半パン に 改造 し た もの  
を 着用。(しらね と 違っ て 冬 は 寒 そ う で あ る)

・ 性格 e t c . . . . .

ボケ 役 か ツツ コミ 役 か と 聞か れ る と ボケ 役。しらね の 一歳 下 で、艦  
これ の 世界 に 来 る 前 は な り た て 高 校 生 だ っ た。たま に よ く わ か ら な  
い ボケ を か ま す こ と が あ り、しらね を 困 ら せ る こ と が あ る。身体 能力  
は 元々 高 か っ た た め、対艦 ミサイル を 使 わ ず 接 近 戦 に 持 ち 込 み 深 海 棲

艦を沈めることがある。基本的には優しいが、キレるとやばい。ちなみに、しらねから影響を受け、はたかぜもオタクである。

身長は150cm。／＼（ ）。（ ）。（ ）これも重要！

・しらね、はたかぜが来た艦これの世界

基本的には実際の艦これと同じである。第二次世界大戦途中で深海棲艦が現れ、世界各国は戦争どころではなくなり、同盟を組み深海棲艦に立ち向かったが、国々によつて考え方も違えば敵国同士だったところもあり、連携がとれず、ヨーロッパではイギリス、ドイツ、イタリア、アジアでは日本、南北アメリカではアメリカ合衆国の5カ国のみがやっとこさ国家を維持できる程度にまで至ってしまった。

## 改装案

しらね、はたかぜの改装案

システムの旧式化、能力向上の限界につき、次の装備を改装する  
しらね型護衛艦 1番艦 『しらね』

### 改装前

- スロット1 「73式54口径5インチ速射砲」
- スロット2 「74式アスロック・ランチャー」
- スロット3 「RIM-7 シースパローミサイル」
- スロット4 「CIWS」
- スロット5 「68式三連装対潜魚雷発射管」
- スロット6 「SH60J」

### 『改』改装案

大破したしらねの艦装は修復が不可能だったため、開発で出てきた『Mk. 41 mod. 18』VLSを搭載し、対空、対潜戦闘能力が向上した。ミサイルについては『ESSM』が16セル、『アスロック・ミサイル』が16セルになっている。ハープーン対艦ミサイルについては搭載しようにもスペースもなければスロットもないため、対艦戦闘と艦隊防空戦闘ははたかぜに依存する。

速射砲については、はたかぜの5インチ砲を移植。失ったRIM-7についてはランチャーのみを修理、ミサイルはESSMを運用する。SH60Kについては開発したら出てきたので搭載。

電子機器類はたかなみ型護衛艦とほぼ同規模まで発展、改修されている。

- スロット1 「73式54口径5インチ速射砲」
- スロット2 「Mk. 41 mod. 18 VLS (32セル)」
- スロット3 「CIWS」
- スロット4 「ESSMミサイル」



スロット5 「68式三連装対潜魚雷発射管」  
スロット6 「SH60J(K)」

はたかぜ型ミサイル護衛艦 1番艦 『はたかぜ』

#### 改装前

スロット1 「73式54口径127mm速射砲」  
スロット2 「Mk.13 mod.4」  
スロット3 「ハーブーン4連装発射管」  
スロット4 「CIWS」  
スロット5 「74式アスロック・ランチャー」  
スロット6 「68式三連装対潜魚雷発射管」

#### 『改』改装案

能力的にはあきづき型護衛艦とほぼ同規模に発展し、最大誘導数が2発から5発まで上がった。VLSについては、まだ1つしか開発出来ていないため、アスロック・ランチャーはそのままにしてある。また、アスロックランチャーには予備としてハーブーン対艦ミサイルを4発入っている。そのため、アスロック対潜ミサイルは12発しか搭載していない。(しらねの分)

対潜戦闘は基本的にはしらねに依存する。

スロット1 「オート・メラーラ54口径127mm速射砲」  
スロット2 「Mk.13 mod.7」  
スロット3 「74式アスロック・ランチャー」  
スロット4 「ハーブーン4連装発射管」  
スロット5 「CIWS」  
スロット6 「68式三連装対潜魚雷発射管」

ここから始まるリズムに合わせて

## 1話

どこかの島にて

「で、ここ何処かな?」

「俺に聞くな」

どうも、なんかよー分からんけど海水浴に行ったら艦これの世界に  
来てしまった兄弟です!

なぜ艦これの世界ってわかるかってえ?なぜなら……

「坊やだからさ」

うん違うね、艦装をつけてるからだよ!!何でそこで赤い彗星が出て  
くるんだよ!?

「嫌だつてそんな聞かれ方されたら、ねえ?」

はあ!?!なんでそんな曖昧なんだよ!!ちゃんとした理由はないのか  
よ!?!

「はあ、どうしたもんかねえ……」

ちよんちよん

「ん?」

艀装番号143『しらね』の頬をつつく手のひらサイズの小人。

「なんだどうした妖精さんよ?ん?なになに:ナン:ダト!」(; ;  
、ム・・)

「どうした?しらね?」

艀装番号171『はたかぜ』がしらねに質問する。

「いやーなんかこの島さ、深海棲艦の勢力圏らしいんだわ」

「あ、詰んだなこれ」

「つか、今なんで『しらね』って呼んだんだ?」

「だって、しらねの本当の名前が出てこなかったから」

「は?どゆこと?」

本当の名前が思い出せない……?そんなことってあり得るのか?  
そもそも僕の名前は?☆\*@\$#&?で、弟の名前が♪@&☆!!#  
\$……ん?おいおい待て待て待て!?な、なんだこれ!?思い出そうとす  
るとなんだこれ!?自分の名前にモザイクがかかった感じは!?  
も、もしかして:自分の家は……:お、おもいだせないだとお!!??

「な、なあはたかぜ?」

「なんだどうしたしらねよ?」

「おいなんで上から目線なんだよセリフが!?:てかそれは置いといて、お前も思い出そうとするとモザイクがかかったようになるのか?」

はたかぜはそれを肯定するかのように首を縦に動かす。おいおいマジかよ。

「どうすりゃいいんだ……:ここもどこかわからない上に自分の名前や家の場所も覚えていない。逃げようにもここは深海棲艦の勢力圏:」

「とりあえず、情報収集するしかないだろ」  
「……だな」

仕方ない。来てしまったのは来てしまったのだから、帰る方法を探しながら逃げるしかねえな…

どうすつかなあと、はたかぜと共に考えていると、しらねの艦装が慌ただしく音を立てる。

「ど、どうしたんだ…？」

「さ、さあ…」

背中に背負っている艦橋艦装から幹部戦闘服を着た妖精さんが飛び出してきて、耳元でしらねに何かを伝える。

「え…？ふむふむ…ナ、ナンダツテー!?」

「??どうしたんだ？」

青ざめた表情のしらねにはたかぜがおそろおそろ聞く。

『「なんか無線を拾ったので傍受してみたところ、約5分後にこの島が空爆されることが分かった」という事らしい…」

「よし、逃げるか」

「賛成ー!」

二人は海に受かって振り向き、走り出す。艦装の中では妖精さん達がタービンに火を入れ、各隔壁を閉鎖。対空戦闘の準備を進めていた。

「しらね型護衛艦一番艦しらね!出撃いいいい!!」

「あ、ソレやらないといけないパティーンですか？」

「そうだやれ異論反論は認めん!」

「はあ…はたかぜ型護衛艦一番艦はたかぜ、いつきまーす」

「なんか棒読みな感じがするけど…まあいいか」

しらねのつぶやきを他所に、はたかぜは海に音をたてて立つ。  
それに続くようにしらねも海へ。初めての体験に感動の声を上げる。

「す、凄いな…」

「たすいかに…」

感動に浸ってる場合ではないと妖精さん達のはやし立てる。

「ホイホイ、はたかぜ、機関全速前進だ。急いで離脱するぞ」

「了解した。さっさとおさらばしないっ!?!」

「どうした？」

「レーダーに感あり！国籍不明機多分深海棲艦機！その数50！距離35km!!」

「おいおいなんで多分なんだよっ！か後2分も経たないうちに来るぞ!?!」

艦装では慌ただしく配置につき、重機関銃や砲塔内に弾薬を運んで行く妖精さんの姿が。

「ああもうめんどくさい!!ここで全機撃墜してから逃げるぞ!!」

「了解だしらね！妖精さん、俺の積んでる対空ミサイルの射程は?」『40km』?よろしいならばすぐさま発射だ!」

ラジャーと言わんばかりの敬礼をはたかぜにした妖精さん達は、艦装に戻る。すると右側の艦装に付いているターターシステムと連動しているミサイルランチャーが動き、下からSM-1艦隊防空中距離対空ミサイルが装填、目標がいる空域に向けられる。

「こちらも対空戦闘用意！シースパローの射程に入り次第発射！73

式も対空砲弾に換装、急げ！」

しらねも負けじと妖精さんたちに指示を出す。それに応えるべく妖精さんたちが艀装の上で走り回る。

「対空戦闘用意！・目標、国籍不明機ならぬ深海棲艦機、一発目発射後立て続けに二発目も発射！・一番、発射！・リメコンド・ファイヤ!!」

ドツ！シュバアアアアアアアアアアア  
!!!!!!

ものすごい量の白煙を残しながら大空に昇っていくスタンダードミサイル。すかさずランチャーが元の位置に戻り次弾を装填、発射する。しらねとはたかぜはスタンダードが飛んでいった空をじつと見つめていた。

「当たってくれよ……」

「……」

はたかぜの艦橋艀装の上でイルミネーターが動き、目標を追尾し続けていた。

## 深海棲艦機 s i d e

深海棲艦機は仲間であるカ級潜水艦からの情報で、とある島に向かっていた。

内容は『敵ノ偵察艦隊ト思ワレル艦娘ヲ確認。武装ハ主砲ガ2門魚雷モ確認シタガ量ハ少ナイト思ワレル』

これを聞いた母艦は、こんないい獲物はない。対艦目標訓練だ！見せしめとして沈めてこい！と言われ、飛んできたのだった。

あともう少しで敵艦である艦娘が見えるはず……そう思った瞬間だった。

一番隊の先頭を飛んでいた急降下爆撃機が爆発、木っ端微塵に吹き飛んだ。そしてもう一機、後ろを飛んでいた二番機も、同じように吹き飛んだ。

何が起きたのか。護衛の戦闘機はバラバラに動き、攻撃してきたと思われる敵機を探すが、その姿は見当たらない。状況が掴めないまま、一番隊は回避行動をとるも次々に撃墜され、全滅した。

攻撃を受けている。そう思った深海棲艦機二番攻撃隊隊長は残った味方に対して、海面ストレスを飛ぶように指示する。

全機が降下を始めたのを確認した二番隊隊長は、それに続くため、降下をはじめようと機首を下げると、自分に向かって飛んでくる墳進弾らしきものを確認した。

急いで機体を反転、急降下を始める。しかし、その墳進弾は自分に付いてくるように向きを変えた。無線がうるさい。部下から逃げてくぐさいの連呼。そんなのは分かっている。けど、逃げられない。早い早すぎる。もう目の前まで迫ってきている。ああもう誰だデマを流したのは……クソが

瞬間、機体にスタンダードが刺さり、爆発した。

side out

しらね&はたかぜ side



「しらね、7発中7発命中。迎撃数7機だ。目標群は低空飛行しながら近づいてくる。距離は28kmだ」

「了解了解。はたかぜはそのまま迎撃を続ける。20km圏内に入り次第中断。シースパローと73式、CIWSで迎撃する」  
「了解」

次々にスタンダードが発射され、はたかぜが白煙で見えなくなってきた頃、深海棲艦機は既に半数を撃墜されていた。

「そろそろシースパローの射程だ！撃ち方用意！」

しらねの左艀装のヘリ格納庫に付いている8連ランチャーとイルミネーターが作動する。

妖精さんが艀装から出てきて、準備ができたことをしらねに伝える。

「よし、目標ロック確認！発射！ファイヤー！！」

バシユウウウウ……

SM-1よりも軽い音を立てながらシースパローがマツハ2.0という速さで深海棲艦機に迫る。

回避するまもなく8機の深海棲艦機が落とされる。

「はたかぜ、目標との距離は？」

「しらね……あんたも対空レーダー積んでるだろ……まあいいや。目標との距離は14kmだ」

「よし、主砲射撃用意！」

「了解！主砲射撃用意！」

しらねは両肩上に付いている73式5インチ砲、はたかぜは同じく

両手の5インチ砲を深海棲艦機に向ける。

「喰らえ！」

「ぶっ飛ば変隊!!」

「え!?!どゆこと!?!」

ダンドンダンドンダンドン  
!!!!

しらねのつぶやきを他所に次々に対空砲弾をぶっぱなすはたかぜ。しらねも納得いかないとブツブツ言いながら撃ちまくる。

撃ち出された対空砲弾は深海棲艦機の未来位置へと飛んでいく。そして自ら発信している電波を受信、爆発し吹き飛ばす。

砲声が鳴るごとに爆炎の花を咲かせながら散っていく深海棲艦機。いつの間にか砲撃はやみ、唯一音を立てているのは二人の機関と打ち寄せる波だけになっていた。

「レーダーに反応は？」

「無しだ。全機撃墜だな」

「なんか、あけっけなかったな、はたかぜ」

「そうだな…」

しばらく海の上を滑るように進んでいると、しらねの艦装から妖精さんがでてくる。どうやら、へりを飛ばすらしい。

『へりを飛ばしたいから艦装を並行にしてくれ』?こ、こうかか?」

妖精さん：Σ d || (・ωー、○) グツ♪

しらねが艦装を意識すると、へり甲板が持ち上がり海面と並行になる。それを合図にするように格納庫から羽をたたんだ状態のSH6

0Jがでてくる。発艦位置につくと妖精さんがその羽を伸ばし、テイルローターを広げ、安全を確認し、ヘリから離れていく。

発艦準備が整ったSH60Jはエンジンを起動、メインローター、テイルローターを回し始める。

「二番機、発艦を許可する！」

しらねの号令とともに固定フックを解除、大空へとゆっくり上がってゆく。

「いいなあ俺へり甲板はあるけど、いちいち砲を動かさないといけねえし……」

はたかぜ型護衛艦はへり甲板は持っているが、後部砲塔をいちいち両舷のどちらかに動かさなければならず、使い勝手が悪いのだ。

「ま、それはしようがねえだろーよ。元々はたかぜ型護衛艦は艦隊防空艦として建造されたんだし」

「たしかに」

しらねとはたかぜの会話をよそにSH60Jは高度を上げ、しらね達の前方海面をほうように飛び始める。

SH60Jは前哨戒機のHSS-2よりもスペックが上昇し、対潜水艦能力以外にも、対水上対空能力もアップしている。その為、艦から見えないミサイルも探知可能なのだ。言わば、携帯型早期警戒機である。

「つか思ってたんだけどさ」

「どうしたんだ藪から棒に」

「いや、なんで妖精さん達は深海棲艦機が来るってことがわかったんだ？」

Bannon!!

「オウっ!?!」

説明しよう!!と、言わんばかりの勢いでしらねの艦装からでくる幹部妖精さん。ごによごによとしらねに理由を話し出す。

「ふむふむなにになに? 『あなた達がここについてからずっと変な無線を受信していて、面白そうだったから解読してみたら襲撃&もう位置バレてーらつーことで、お知らせしました』だつてさ」

「おいちよつと待て妖精さんよ。あんたらの気まぐれがなかったら俺らさ、今頃沈んでるんじゃないやありませんかねえ?」

ギギギギギギ……と音がしそうな感じでそっぽを向く幹部妖精さん。口笛を吹いているようだがただ空気が出るだけで音は出ていない。

「……」ガシッ

『すみませんはたかぜさん!!出来心だったんですだからその手を外しておアアアアアア!!?』……程々にしといてよ?」

「あ、いいんだ。了解した」

はたかぜにアイアンクローをかまされながらもしらねに助けの視線を向けていた幹部妖精さんだか、しらねの一言に絶望したように顔を青く染めていた。

「さて、お仕置きタイムだ」

いやアアアアアア!!?と叫んでる幹部妖精さんはほつときながら、しらねはSH60Jからの情報に目を通す。

「特に異常はなしか」

「……………」グリグリグリグリグリグリ  
幹部妖精さん：オ”ア”ア”ーッ!!??

この後、幹部妖精さんははたかぜの気が済むまでグリグリさ  
れました。

しらね艤装艦内にて

幹部妖精さん：ビクンツビクンツ…

ほかの妖精さん達：(；▽；) ……うわあ…

## 2話

「つーかあの深海棲艦機はどこから出てきたんだか…」

「俺の対空レーダーにも35km圏内に入るまで気づかなかつたし…」

「妖精さんや、何故かわかる？」

「しらねは首を捻ると、ちようど艦橋で水平線を監視していた妖精さんに訪ねてみる。」

妖精さん：(。ー、ω、ー)：(。ゝ。ゝ) ㄱ

『さっぱりわかんね』うーんそうか〜」

「そーいやここまで無計画で突っ走ってきただけ、燃料とか弾薬とか確認しなくていいのか？」

「そうだねえ…」

ふむ…と考え込むしらね。そしてなにか思いついたのか、妖精さん達に指示を出す。

「で、どうすんの？」

「とりあえずもう一機へり飛ばして陸地がないか探す。燃料弾薬の確認はそのあとでいいかな〜って」

「なるほど、しらねにしては名案だ」

「おいどうい事だはたかぜえ？」

「だってまともな提案したことあるかお前？」

「うぐっ…」

はたかぜからの指摘を受け、ダメージを受けるしらね。

「はい論破〜ザ〜コザ〜コww」

「後で覚えておけよはたかぜえ…」

ゴバア：シヤツシヤツシヤツシヤツ……

しらねソナーマン妖精：!!

しらねのCICで警戒していた妖精が奇妙な音を拾う。それは水中で空気が抜けるような音と何かをかき混ぜているような音だった。それを聞いた妖精は砲雷長妖精に急いでそのことを伝え、進路の変更を具申する。

砲雷長妖精は艦橋に「魚雷接近」と送り、対潜水艦戦闘を発令する。

「なっ魚雷!?!何処から!?!」

「つべこべ言つてないで回避だ!」

「あーもうなんでこんな時に!!進路1―3―5ようそろー!」

「進路1―3―5ようそろー」

グググツと体制を右に傾け、魚雷を回避する二人。

「!!はたかぜ!また来た!進路2―4―0ようそろー!」

「ああもうめんどくせえな!まだ来るのかよ!!」

はたかぜは大声で暴言を吐きながらしらねが言った進路通り魚雷を回避する。なんだかんだで真面目なはたかぜである。

しらねは回避し終わると即座に反撃に移る。

「対潜戦闘よーい!左弦三連装魚雷発射管、1番管圧縮空気充填開始!同時に諸元入力開始!」

しらねは魚雷の発射源に対し自身の左側を向け、太ももに装備されている68式三連装魚雷発射管を向ける。

それと同じくはたかぜも左側を向け、足首に装備された魚雷発射管を向ける。

「しらね!データ送れ!こっちも攻撃する!二段攻撃で確実に沈める

！」

「了解はたかぜ！はい、データ」

「よし！諸元入力完了！1番管、発射ア!!」

「同じく1番管発射!!ぶっ飛べ!!」

バシユシユツ!!

二人から撃ち出されたのは97式対潜魚雷。この魚雷はスクリューではなく、ウォータージェットポンプで進むため、水中速度45キロノット以上という破格の速度を出す。

97式対潜魚雷は自ら探信音を出しながら、敵潜水艦がいるであろう区域に進んでいく。

s a i d o u t

カ級潜水艦（しらね達を見つけた奴ではない）は艦娘の航空機に見つからないよう潜水しながらアンテナを伸ばし、又級軽空母から2隻の艦娘の情報を得る。

『ソノ2隻ハ我が航空隊をヲ壊滅サセ逃走中。才前ノイル海域ニ逃ゲ込ンダ可能性ガアル。見ツケ次第撃沈セヨ。特徴ハ砲ハ二門ツツ、ソノ他ハ対空墳進弾ヲ装備シテイル模様。クラスハデストロイヤード』  
情報を受け取ったカ級潜水艦は返信せず海中へと潜って行く。

ある程度の深度に達すると機関を停止し、静寂航行（スクリューを使わず、海流に身をまかせて進む方法）で目標の艦娘たちが通るであろう海域へと進んでいく。

しばらく航行していると、パツシブソナーに反応が出る。スクリュー音は2隻、そのことを確認したカ級潜水艦は潜望鏡深度まで浮上し、潜望鏡で目標を確認する。2隻の艦娘が航行しているのを確認すると、自身の魚雷発射管全部に魚雷を装填、目標の未来位置をはじき出し艦首を向ける。距離3500、慎重に狙えば当たる距離であ



る。

まず初めに1〜2番管に注水、発射口を開き発射する。発射された魚雷は白い航跡を残しながら目標である艦娘に向かって行く。その後、回避するであろう方向に艦首を向け直し、3〜4番管を発射する。その間に1番と2番管に再装填を行う。

そろそろ命中しても良い時間なのだが破壊音が聞こえないので、再度潜望鏡深度まで浮上し確認する。

発射した4本の魚雷は避けられ、こちらに対し指を指す艦娘を確認したカ級潜水艦は緊急潜水を開始する。

カ級潜水艦にとっては高速で潜っているつもりだが、現代艦であるしらねやはたかぜにとってはただ潜水しているだけに過ぎない。着実に迫っていた2本の97式対潜魚雷はカ級潜水艦の艤装に着弾、貫通しその成形炸薬弾頭を起爆させた。

s a i d o u t

しらね&はたかぜ s a i d

ドドーンと白い水柱が立ったあと、黒い重油らしき物や艤装の破片が浮いてくる。撃破確実である。

「1番機、爆発地点を調査しろ」

1番機：(\*・▽・)ゞ

しらねの指示に従い、SH60Jが爆発地点でディッピングソナーを下ろし、海中を探る。

1番機：(∩・ω・)∑d=(・ωー、o)

『撃沈確実』だってさ」

「よく分かるなしらね……」

「え、よゆうで分かるでしょ?」

「えっ」

「えっ」

固まる二人。どうやらはたかぜにはよく分からないらしい。

航空機を扱わない&扱えない艦娘によくあることである。(ただし、無線を介してなら分かる)航空機を扱える艦娘でも、最初の頃は妖精さんとのコミュニケーションが分からないため、命中精度が下がったり索敵が曖昧になったりするのだ。そのため、練度を上げる必要性があるのだが、しらねは護衛艦時代の経験もあるので妖精さん達が何を言ってるのか分かるのだ。

「……と、とりあえず進路を戻して2番機からの報告を待とう」  
「了解した……」

「…」

「…」

無言のまま海を進む。聞こえるのは二人の機関の音とかき分ける水の音だけである。

「おいしらね」

「何かなはたかぜ？」

沈黙に耐えれなくなったはたかぜがしらねに質問する。

「まだ連絡ないのか？」

「無い」

「暇だ」

「仕方ない」

もはや喋るのも億劫なのか、単語で会話する。

「っ！2番機より報告!!」レーダー感あり！方位2—7—3、距離50000!」

「よっしやあ!!これでやつと休めるう!」

「だからといって速度を上げるなはたかぜ」

「チツバレたか」

蒸気機関とは違ったタービン音が高まる。

はたかぜが搭載しているのはガスタービンエンジン。ジェット機と同じエンジンのため、蒸気タービンより立ち上がりが高く、現代の護衛艦艇のほぼ全てがこの機関を搭載している。

「ただでさえ補給ができるかどうかわからないのになんでエンジンの出力を上げるんだ…大食らいめ」

「いやお前も言えねえだろ」

「……」

しらねの機関も、戦時中よりか性能が良くなっているが、それでも燃料はよく喰う。

はたかぜの指摘に黙り込むしらね。ドンマイ。

「……そろそろ島影がレーダーに映るところだから周囲警戒を怠るなよ」

「ホイホイ」

「海岸線以上はなし…上陸隊発艦はじめ」

艦橋からの報告を受け、立ち入り検査隊を載せたSH60Jがゆっ

くりと飛行甲板を離れていく。

立ち入り検査隊とは護衛艦に乗船している砲術科等の隊員たちで編成された部隊で、護衛艦1隻に1個部隊ずつある。

「はたかぜ、対水上・空レーダーに反応は？」

「今のところない。2番機も対空哨戒に出ているが、何も連絡は来っていない」

「了解。引き続き監視頼むわ」

1番機：(「・ω・」)

1番機から到着の報告を受ける。

「了解。立ち入り検査隊下ろしたら上空から援護せよ」

1番機：(「?・?・?」)

機内から74式7.62mm機関銃をせり出し、ロックを外し安全装置を解除。薬室に初弾を送り込む。

地上でも立ち検査隊のメンバーが89式小銃に初弾を送り込み、分隊ごとに別れ散らばっていく。

しらねも主砲に徹甲弾を詰めて、いつでも援護射撃できる体制をとる。

1番機：φ(「・ω・」)…(「\*・▽・」)／

『上陸地点および周囲に異常はなし』了解。1番機は警戒要員2名以外の地上部隊を収容し、帰投せよ」

1番機：(「\*・ω・」)ゞ

「はたかぜ、念願の地上だ。周囲警戒を怠るなよ？」

「分かってる。せっかくの休憩時間を台無しにしたくないからな」

2人はたった数時間しか陸から離れていただけにもかかわらず、2度の深海棲艦による攻撃を受け、心身ともに疲れていた。

「念願の陸…と言ってもまだ1日たつてないんだよな」

「初っ端から飛ばしすぎだろーよこの世界…あー腰いてー」

「それなく」ジャバジャバ

愚痴をたれながら上陸を果たす二人。ある程度波打ち際から離れ、艦装をはずす。

地べたに置かれたしらねの艦装にSH60Jが着艦していく。着

艦を果たしたSH60Jには妖精さんたちが群がり水をかけて塩分を落としていく。妖精さんたちはそれが終わると、砲身や甲板、ミサイルの再装填等を行う。はたかぜの妖精たちも同じように整備していく。

そんな横でごろごろする二人の艦息。うん、なんて対照的・・・

「あーどっか燃料とか弾薬とか落ちてねーかなー」

「いや、おちてねーだろ。な、妖精さんよ?」

妖精さん：(。|、ω、|)・、ω・、)……d(、△、\*)

「はっ?」

「ん?」

しらねが妖精から何かを聞き、固まる。そして妖精さんたちに何か指示を出してゆく。どうやら、上空から何かを見つけていたらしい。「ど、どうしたんだしらね?」

「いやそれがさ、どうやら少し先に建物があるらしいんだわ」

「((;)。∩( )な…んだと…」

「もう先発隊を向かわせてるから、そろそろ報告がくるかな?」

妖精さん：(\*、・ω・)ゞ／(、ω、)／d(、△、\*)

「どうやら、艦息が休憩できるような広さがあるらしい。」

「よし、はたかぜ艦装背負え。移動するぞ」

「(;・、・∩、)ナン…ダト!?!」

「はよせい」

「へいへい…あーもーめんどいわー」

しづぶ艦装を自分に取りつけていくはたかぜ。ちなみしらねは妖精さんが先発隊を独自先行させていたことに気づいてから背負っている。まあ、当の本人もだるそうな顔をしているが。

「準備出来だぞしらね」

「了解。妖精さん、道案内頼んだ」

妖精さん：(\*、・ω・、\*)ゝ

武装した妖精さんの後ろをついていくふたり。どうやら海岸線近くにあるらしく、砂浜を足の艦装で抉りながら歩いていく。

しばらく歩いて行くと埠頭らしきコンクリートの塊が現れた。

「おいおい…砲撃されてんじゃんココ」

「確かに…やけに森が薄いと思ったら」

埠頭の近くにある木々は砲撃のせいか、なぎ倒されたり吹き飛ばされていた。埠頭も砲撃を受けたらしく、半分は使えない状態だった。

妖精さん…ゞ（\*´▽´\*）ノ

「うん？おお……」

「まあ、使えんこともないか…」

妖精さんが案内してくれた所は、深海棲艦から攻撃を受け、放棄された鎮守府だった。

ちなみに、半壊である。

### 3話

妖精さんが案内してくれた鎮守府（らしきもの）は今の2人は十分な建物だった。

「とりま、艦装をこの中に置くか」

「そやなく」

小休止したと言っても数分間しか休憩していない2人は早く艦装を下ろそうと少し乱暴にドアを開ける。

ギィ：ギギギツガコン。バッターン。

「……」

しらねの手に残っているのはドアノブのみ。ドア本体は中へと倒れたのだった。

「ま、まあ雨風しのげればそれでいいし？なあはたかぜ？」

「俺に聞くな……」

細かなホコリが舞うが、気にせず中へと入っていく。

入って正面が当直と書かれた板がぶら下がった部屋があり、廊下が左右に伸びてそこに各部屋が配置されている。

とりあえず当直室に艦装を置き、鎮守府内を探索する。

「ああ、腰が軽いんじゃない？」

「ハイハイ黙つとれはたかぜ。妖精さん、個人携行火器とかある？」

妖精さん：（；—ω—）（△）（・ω・）

妖精さんから渡されたのはSIGP220改め9mm拳銃。装弾数9発と少ないものの、自衛隊では愛されてる？拳銃である。

「はたかぜ、お前も拳銃持て。この鎮守府を探索するから」

「ホイホイ。銃の使用条件は？」

「身の危険を感じたら使つてよし」

「りよーかい。じゃ、こっちから行くわ」

「なんかあつたら連絡しろよ？」

しらねの言葉にはたかぜは手を振って返答する。ハア、と、溜息をつきながらも足元に立ち検隊の妖精さんを連れて各部屋一つ一つを

くまなく探索する。

「あー煙たい〜」

妖精さん：(一一、D、)ゲホゲホ

ドアを開ければ埃が散り、部屋全体に広がっていく。机や床に落ちている書類はどれも古いものばかりで、当てにならない物しか無かった。

「書類もほとんど古いのばっかで当てにならねえなあ…」

妖精さん：(、一ω一)：

ガサゴソガサゴソとまだ散らかっている書類や資料を漁るが、めばしい物は見当たらない。

カタツ

「ん？」

妖精さん：(。、ω、)？

???:一ω、(

「……………」

なんかおる。本棚の後ろになんかおる。恐る恐る妖精さん達が近づいて行く。(拳銃を構えながら)

妖精さん：一ω、(ヒョコッ

鎮守府妖精さん：?)?・ω、(？コウサン

妖精さん：(・D、?)

鎮守府内妖精さん：(つD、)ノ(、ω、)＊、／(、↓

)／・＊、／(、O、)／

妖精さん：(・A、、)

なんか色々話してるけど、何言ってるかわかんねえ…。しばらく本棚の後ろでワイワイガヤガヤやった後、妖精さん達が全く知らない妖精さんを連れてやってきた。

鎮守府妖精さん：(＊、ω、)ゞ

「あ、どうも…？」

戸惑いながらも答礼を返す。どうやらまだ鎮守府が機能していた時にいた妖精達の生き残りらしく、他にも何人かこの鎮守府内にいるとの事。



それを聞いたしらねは、はたかぜに一報を入れ、鎮守府妖精さんに他の妖精さん達を集めるよう頼む。

しばらくすると反対側からはたかぜが妖精さん達を引き連れながら走ってきた。

タツタツタツ

「おくいしらねえく新しい妖精ってー？」

「おー、この子らだよ」

「ふーん…あ、はたかぜだ。よろしく」

鎮守府妖精さん：(・ω・)ゞ

はたかぜの挨拶に敬礼で答える鎮守府妖精さん。

鎮守府妖精さんの案内で鎮守府内を歩いていくと、『食堂』と書かれた広い部屋に着いた。そこには、ボロボロになった大きなテーブルと、鎮守府妖精さんと同じような服を着た妖精さん達が集まっていた。

鎮守府妖精さん：(・ω・)(・▽・)人(・▽・)

妖精さん：(・?・)\*人(\*?・)

「結構残ってたんだな…」

「鎮守府妖精さんや、君たちはどのくらいここにいたの？」

鎮守府妖精さん：(・ω・)(・△・)(・ω・)v…?

『2年』…?!そんな前からこの鎮守府にいたのか…」

「うーん、てことはさ…この鎮守府が放棄された理由も知ってんじゃない？」

「確かに…」

スッと目を向けてみると、悲しそうな顔になった鎮守府妖精達。中にはプルプルと涙目になっている奴もいる。

どうやら放棄された頃を思い出し、悲しくなっていたらしい。

この鎮守府は規模が小さく、戦力も重巡以下の艦娘達しかおらず、主な任務は輸送船舶団の護衛ばかりだったが、士気は高く艦娘達の仲もよく楽しい日々を過ごしていた。が、ある日ヲ級フラッグシップ(赤いオーラを出したヤツ)を旗艦とする深海棲艦隊が強襲攻撃をかけてきて、提督は死亡、艦娘達の殆どが轟沈した。その時何も出来な

かった自分たちを今でも恨んでいるとのこと。

「……」ナゲナゲ

鎮守府妖精：(・。・。ω。・。・) !?

「悔しかっただろーよ。何も出来なかった。それは僕達も凄くわかるよ」

「助けたい。でも出来ない。目の前で散っていく命。憲法という鎖に縛られ出動できず攻撃もできない。一方的に沈められていく……」

「泣くことも出来ずただただ見つめるだけ。でもさ、今は違う。この体を持った。人間だった頃の記憶はもうないけど、艦としての記憶はハッキリと覚えている。だから、泣けるんだよ、泣いていいんだよ。だからさ、君らも泣いていいんだ」

何も出来なかったあの頃を思い出しながら妖精達に声をかける。涙目で声も震えてるけど、こいつらもそれは同じ。某国に攻め込まれ、対処するために母港を出港、出撃したが、上の輩が全くの無能で攻撃されても防御するだけ。ジリジリと押され始め1隻、また1隻と沈められていったあの時。

パタリ、とテーブルに目から落ちた水が弾ける。妖精さん達も涙を流し、声を上げて泣いていた。

「あー申し訳ない。惨めな姿を見せてしまったね…」

鎮守府妖精：(—ω—)。(—ω—)(\*(・?・)??

「あくなんか久しぶりに泣いたわ〜」ケラケラ

「はあ、お前さんはマイペースやなあ」

本日も我が道をゆく！b y. はたかぜ

「さて、本題に入ろうかな。妖精さん、ここで補給できる物資とかなないかな？特に燃料がね…」

「出来れば消費したミサイル、砲弾も補給したいんだかが…」

鎮守府妖精：(；—ω—)(ノ、∩(\*、▽、)(∥。ω)ノ

「おっ？これ？」

鎮守府妖精から渡されたのは、この鎮守府内に残っている弾薬と燃料等のリスト。燃料50、弾薬120、鋼材30、ボーキサイト160と、しらねとはたかぜが2回ほど補給できる程度はあるようだ。

「ミサイルは補給出来るのか？」

鎮守府妖精：(；・ω・)??(、ω、)？

ミサイル？ナニソレオイシイノ？との事。20mm機関砲弾、127mm砲弾は補給出来ても、現代兵器であるミサイルは補給できないとのこと。なお、97式魚雷も同様である。

「とりあえず、最後の頼み綱のCIWSだけでも補給しておこう」

「そうだな。CIWSがなけりや防御も出来ねえし」

「つーことで、20mm機関砲弾頼める？」

鎮守府妖精：(？・・？・？)(ゞ)(・ω・)∩

『その他』…？うーん、これ、いける？…」

しらねが取り出したのは127mm対空砲弾。VT信管を搭載した対空砲弾だ。

鎮守府妖精：(；—ω—)：(？、・ω・、)？

「たんのます！」

しらねからいくつかの弾を貰うと、ソレを脇に抱えて工房へと走り去っていく。

それを見届けると、他の妖精さんにも指示を出し、とりあえず補給を実施する。

豆鉄砲かもしれないが、余った鋼材と弾薬で12.7mm弾と7.62mm弾を補充する。ミサイルがあまり使えない今、使えるものは使わなければ生き残れないのだ。

「しらね、そーいやこんなのあつたんだが」

「ん？なにになに……」

はたかぜが持ってきたもの、それは海図と数枚の書類だった。

「おい、はたかぜ」

「なんだねしらねよ」

「よくやった」

「もつと褒めてもいいんだよ？」

「じゃあ後で沈めるな？」

「すいません調子に乗りました」

土下座するはたかぜをジト目で見つ、書類の内容を確認するしらね。

それはこの鎮守府海域で現れた深海棲艦についての書類だった。

「ふむ……なるほど」

「……どんな内容なんだそれ？」

「この海域でよく出現する深海棲艦について書いてある」

「ふーん……ちなみにどんな敵艦が来るの？」

ほれ、とはたかぜに書類を渡すしらね。書類を渡されたはたかぜは目を通す。

「……なあしらね」

「なんだはたかぜ？」

「何この『姫級』って？」

「その書類じゃ『1隻で1個艦隊相手にできる』奴らしーぞ」

「なにそれおいしいの？」

「はたかぜ、現実を見ろ」

マジかよオどうやって倒すんだよオと嘆くはたかぜ。対艦ミサイルと言えどもはたかぜのハーブーンしかなく、たった8発しかない。

どれだけ連射性が高かろうがたかが127mm、豆鉄砲だ。

一番いいのは遭遇しないこと、もし遭遇したら全力で逃げることでろう。

「とりあえず飯でも食おーやはたかぜ」

「…そうだなしらね」

「これしかないのか……」

「あるだけマシじゃね？」

「だな…」

ボリボリと乾パンを貪り食う音が食堂に響くのだった。

「ふう、食った食った」

「全然腹膨れてねえし喉が渇くだけだったけどな」

不服そうに腹をさすのはたかぜ。そんなはたかぜにげんこつを落とすつ、執務室へと向かう。

「失礼しまーす…」

「おいコラしらねなぜ殴ったし」

「黙ってるはたかぜ」

錆び付いた蝶番が軋み、まるでホラゲーのようなBGMを奏でる。しらね達が入ったのはここの鎮守府の要でもある執務室。ここな

らいろんな情報があるだろうと思いついたのだ。

執務室は埃まみれで、床には書類が散乱し、本棚などは無残にも破壊されていた。

「おお、ここから海見えるぞ」

「ほんとだく窓よりも見やすいくつてここ砲弾受けたのかよ……」

隣に隣接している提督室は砲弾を食らったのか、ドアから先が無くなっており、向こう側に見える海がはつきりと見える仕様になっていた。

「これぞ劇的ビフォーアフターってか？」

「笑えねえぞはたかぜ……」

本日二回目となる拳骨をはたかぜの脳天に落とすしつつ、落ちている書類を一つ一つ確認していくしらね。ほとんどの内容はこの鎮守府での活動報告書であり、この鎮守府が主に行っていた船団護衛のものが多かった。

「ふむふむ……この時期から深海棲艦の活動が活発になってるのか……装備の強化が必要。しかし上は全くの無視……か。この鎮守府の壊滅につかながる原因のひとつだな」

「いつつ……あれか？ 輸送船団護衛が多いからって理由か？」

「それもあるし、時折鼠輸送作戦なるものを行っていたみたいだな」

「んーでもさ？ なんで装備を強化できなかったんだ？」

その質問にしらねは少し考え、

「僕らのさ、艦装装着できるスロットって最初から6スロットあるのさ」

「なん……だどつ!？」

「今は全部埋まってるけど、後付けで色々付けられるみたいなんだ」

「そういうことは……もしかして」

「そう、ここに書いてあるとおり、『輸送ドラム缶』なるものを積まなければ輸送作戦は不可能だったんだ」

『スロット』とは、艦装を付けることの出来る限界値で、しらねとはたかぜはイレギュラーであり、なおかつ『護衛艦』という分類に属する

ため、最初から6個ものスロットがあるが、通常の艦娘には2〜3個程しかないのだ。

「しかも練度が高くなった艦娘は上に取られるっていうね……」

「マジか……」

いくら輸送船団護衛任務が主だとしても、練度が十分な艦娘がいなければ失敗するし、最悪轟沈もありえる。

ここの提督はそれをわかっているからこそ、上に打診していたのだろう。

「どこまで行っても上は腐ってんのか？」

「仕方ない。それが軍隊だ……」

バサツと書類を乱暴に机に置き、退出するしらね。それに便乗するようにはたかぜも出ていく。

鎮妖：(、・ω・、) ヽ

「お疲れ〜どうした？」

鎮妖：(\*、・ω・)(、・ω・、\*?) (、・ω・、?) ?

「おおっ!?これはっ!!」

「なんだどうしたんだしらね〜ってえ!？」

「127mm対空砲弾!?マジかよ!？」

「し、試射してもいいか？」

鎮妖：d (、▽、\*)

〜場所は変わって鎮守府埠頭〜

「と、いうことで『第1回妖精さん特製対空砲弾試射会』をやりたいと思いま〜す!!」

「いえー!!どんだんパフパフ!!」

妖精さんズ：???(、ω、) /?? (つ、ワ、c) <

今回の目標は距離2000に浮いている対空目標用気球。電波が反射しやすいように真ん中にアルミホイールが貼られている。

「第1砲塔、射撃準備!弾種対空砲弾!弾数いっぱいっ!!」

しらね妖：?d (、▽、d)

「つてえ!!!」  
ドオン!!

ライフリングを通り抜け、砲身から飛び出した対空砲弾は真っ直ぐ  
目標に飛んでいき、

ボンツ!!

貫き飛んでいった。

「……」

「……」

「「「「……」」」」

第1回妖精さん特製対空砲弾試射会結果発表!!

結果：VT信管作動せず。目標は撃破。

「ま、最初だし仕方ないね……」

「氣い落とさんな妖精さん……」

鎮妖：（・???）?・???）。（ノ口、）。。。

「多分、衝撃に耐えきれず壊れたんだろうね」

「つーことは制作する時にちよい多めにボーキ多めにすりや……」

鎮妖：（（?）（・▽・\*）

なるほどなるほどと、メモをどんどん書いていく妖精さんズ。た  
だ、その容姿に似合わぬ大きなペンを使って書いているためか、なん  
て書いてあるか全く理解できない。

メモを書き終えた妖精さんズはまた工廠に走って去ってしまふ。  
また作るつもりらしい。

「……そーいや資材大丈夫なのか？」

「さあ?」

資材：少なかつたような? そうだっけ?

首を傾げる艦息2人がいたとかなんとか……。



バシヤ……バシヤ……

カシヤツカシヤカシヤカシヤ……

水上偵察機としてはありえない、水上に着水した状態での偵察活動。

しかし、この偵察の方法は高性能なレーダを持つしらね達にとっては脅威ではない。

水上偵察機の報告を見る。そして討つべき敵がいることを確信する。

「ミイツケタア……」

水平線、そこを監視していた妖精さんが何かを発見する。

それは、敵である深海棲艦だった。

鎮妖：（\*ゝ—ω・）ゞ（・ω・ゝ・）（ノ三ゞ（ゝゝ・ω・）ノ  
パパツ!!

ヒユウウウ——

ズウウウウンンン!!!

ビリビリビリビリ……

報告する前に水平線で光が8つフラッシュのごとく光る。飛んできた砲弾は流石に鎮守府には命中しなかったが、その威力は鎮守府を揺らすほどのものだった。

「!?」

「なんだっ!?」

鎮妖：( > , A、 ) > > ( > y < ; ) ノ三 ( ( > ( ・ ω ・ ; ) ノ

「ちいつ!!しらね!敵襲!!」

「艦種はっ!?!」

「重巡4!!駆逐2!!」

「よしっ!!まだなんとかなる!!埠頭に行くぞ!!」

「了!!」

出撃埠頭に着いた2人は急いで艤装を取り付ける。

腰に装着された固定具に艤装接続部を合わせ、装着する。

「機関暖気始め!!メインシステム：システムオールグリーン!!」

「対空、対水上、対潜戦闘システム異常なし!各兵装異常なし!!」

「しらね型護衛艦1番艦しらね!出撃する!!」

「はたかぜ型護衛艦1番艦はたかぜ!出撃いい!!!」

ヴオオオオオオオ!!!

ガスタービンエンジンと蒸気タービンエンジンの二部合唱の咆哮が辺りに響く。砲塔は既に敵艦を補足しており、即座に射撃ができる体制をとっている。

「先制攻撃だっ!!行くぞはたかぜ!!」

「了解!!」

「魚雷深度プラマイ2m!!」

「諸元入力完了!!」

「アスロック、5番から8番発射ア!!」

「つてー!!」

ドツ シュバアアアアア!!!

「続けて主砲斉射!!撃てエ!!!」

「? d (。▽。 d) ファイヤアアアア!!」

ドオン!ドオン!ドオン!ドオン!

「ツ!?ヨケロオオ!!」

「クソオ!?!?!」

パラシエートを開いて着水した8本の対潜魚雷は、深海棲艦艦隊に真つ直ぐ突つ込んでいく。

魚雷が到達する前に着弾した127mm砲弾が回避行動を阻害する。

次々に上がる水柱。ハ級駆逐艦2隻が船体下で爆発したMk46対潜魚雷2本により竜骨を叩き割られ轟沈した。

「敵艦2隻撃沈を確認!!その他敵艦2隻に命中!浸水している模様!!」

「

「よオつし!!初弾夾叉!諸元そのまま続けて撃て!!」

「つ射あ!!」

速射砲を撃ち続けている間にアスロツクの再装填を行う。

アスロツクランチャー後部に設置された再装填装置からアームが伸び、その下を走るようにアスロツクミサイルが再装填される。

再装填された8本の対潜ミサイルにはシャークペイントが施され、その腸を食い破らんと獰猛な笑みを浮かべていた。

「しらね!アスロツク再装填完了!!」

「よし!再度発射!!」

「てえ!!」

ドツ シュバアアアアア!!!

再度撃ち出されたアスロツクは生き残ったり級重巡洋艦に牙をむく。今度は全弾発射という鬼畜さ。計16本の魚雷が襲いかかる。

「グアアアアア!?!?!」

「コンナツ!?!コンナハズハアアア!!!」

次々に命中し、断末魔を上げながら沈んでいく深海棲艦。

全ての音が消え去った時、その海原には撃沈された深海棲艦の残骸と、燃え上がる重油しか残っていなかった。

「敵艦の全滅を確認」

「状況終了。対潜、対水上用具収め」

この世界に来て3度目の戦闘。もう彼らには元の世界の人間としての記憶など残っていないだろう。

## 4話

鎮守府妖精が操る妖精サイズの輸送船を護衛しつつ、北上して行くしらね・はたかぜ艦隊。

なぜ、ここにいるのか、それは少し遡る。

↳敵艦隊殲滅後↳

「やれやれ、深海棲艦も懲りねえな」

「……」

「おいおいどうしたしらね？」

「…なあはたかぜ」

「なんで自分達がここにすることが深海棲艦敵にバレてんだ？」

「……」

はたかぜ脳内：

深海棲艦

敵は重巡洋艦を主力とする

カタパルトを確認済み

カタパルト⇨水上偵察機

偵察機⇨索敵、発見済み

⇨⇨( ^ o ^ ) /

Ω / ( — ω — ) \* (ポクポク) ( ・ ω ・ ) チーン

…

「あかん、敵にバレとる」

「キヤラ崩壊してんぞはたかぜ」

ということ、さっさと基地を捨てなくてはならなくなり、また、資材も底を尽きたので、北上し生きている鎮守府に逃げる作戦を立てたのだ。

「対水上レーダーに感あり、距離12400、方位01612」

「了解、対水上戦闘準備」

しらねとはたかぜの艦装内に警報が鳴り響き、妖精達が慌ただしく配置につき、弾薬を補充していく。FCSS1を起動させ、目標の海域に向ける。

「しらね、対水上戦闘準備完了。いつでも行けるぞ」

「ok。目標、駆逐2隻、主砲撃ちいー方始めえ!!」

ドドドドン！ドドドドン！ドドドドン！

一分間に約30発もの127mm砲弾を発射可能な73式54口径127mm速射砲が火を噴く。

4基あわせて一分間に120発もの砲弾が敵艦隊に降り注ぐ計算となる。所謂オーバーキル、と言うやつである。

彼我12400という距離がありながらも、数の暴力によって2隻の口級駆逐艦はあつという間に海へと消え去ったのだった。

哨戒艦隊だったということも露知らずに。

「さて、そろそろロクマル飛ばすか。妖精さん、準備お願い」

妖精さん：（\*・ω・\*）ゞ

しらねの左舷艦装にちよこちよこと妖精さん達が走り回り、格納庫のシャッターを開き中からロクマル、SH60j対潜哨戒ヘリコプターが顔を出す。ベア・トラップシステムによってヘリ甲板の中央に移動すると、エンジンを暖気、回転数を上げていく。

一定の回転数まであげると、ふわりと機体を浮かせ、空へと舞い上がっていく。

「ロクマル、異常事態があったならすぐ連絡すること。ok？」

妖精さん：（≡▽≡）ゞ

「あ、今のうちに飯食つとこ」

「マイペースだなお前」

今日も通常運転☆by. はたかぜ

妖精さん：(・ω・)！(。・ω・)(△。)

「はたかぜ！ロクマルより報告！『我、敵艦隊捕捉方位2ー4ー4距離40000。終末誘導はアクティブレーダーホーミングでオナシヤス』！」

「りよーかいっ！ハーブーン1番から4番撃ち方始め！」

ドツ　ズバアアアアアアアア！！！！

はたかぜの姿をかき消すように発射されるハーブーン対艦ミサイル。その数、4発。

アップデートにより高空巡航・シースキミングの切り替えが出来るようになり、汎用性が増した。

今回は相手の深海棲艦が対空兵器が貧弱である事を想定し、高空巡航モードにしている。

飛翔したハーブーン対艦ミサイルはロケットブースターを切り離し、ターボジェットエンジンを点火。マッハ0.85で巡航を開始する。

目標敵艦隊であるリ級重巡洋艦を旗艦とする深海棲艦隊は、しらねのSH60Jが常時監視しているのでハーブーンは迷うことなく上空を飛んでいく。

ある程度の距離に近づくとアクティブレーダーを起動、目標を捕捉する。ただ、アクティブレーダーホーミングは、いちいちミサイルに指示を出さなくていいものの、ひとつの目標に対し複数のミサイルが命中してしまうという欠点がある。

アクティブレーダーホーミングを起動した4発のハーブーンはそれぞれの目標に弾頭を向け、加速していく。

深海棲艦隊はターボジェットエンジンの重厚なエンジン音に気づき、濃厚な対空砲火を浴びせるが、技術力の歴然とした差を埋めることは出来なかった。

ドツドゴツオオオオオン……

この攻撃により、深海棲艦隊側はイ級駆逐艦2隻、へ級軽巡洋艦1

隻を失うことになる。

「ロクマルより報告『駆逐艦2隻、軽巡洋艦1隻を撃沈』中々の戦果じゃないか?」

「そうだな。残りはどうすんだしらね?」

「砲雷撃戦で沈める」(・ω・)キリッ

「あーはいはいアスロックである程度ボコしてから砲撃で沈めるね、おkおk」

しらねの一言で全てを理解したはたかぜはFCSを主砲に切り替え、射撃準備を進めていく。

妖精さん：?d(・D・)。

「よし、アスロック発射用意よし!」

「了。はたかぜ、彼我16000を切ったら4発連続発射。深度はギリギリの±2〜3mで設定」

「了解」

しらね、はたかぜの右舷艦装にあるアスロックランチャーが上を向き、ハッチを開ける。

そこから空を覗くのは、最大射程約9km、魚雷の射程も合わせると約16kmにもなる対潜ミサイルである。

妖精さん：d(\*・▽・\*)ヤッチャエ

「射程圏内に入った!アスロック、連続発射!」

「発射!」

バシユシユシユ!!!

ランチャーからハーブーン並とはいかないが、噴煙を撒き散らしながらぐんぐん上昇していく。

「アスロックの着雷に合わせて初弾発射!」

「了解!主砲撃ち方よい!」

目標海域達したアスロックはロケットモーターを切り離し、パラシュートを展開、減速しつつ着水する。

着水したMk.46対潜短魚雷は蛇行しながら目標であるリ級重巡洋艦2隻を捕捉、まっすぐ突っ込んでいく。



り級は飛んでくるアスロツクを確認していたため、回避行動を行っていたが、近代兵器である対潜魚雷に対しては全くもって意味がなく、次々に命中していく。

「はたかぜ！第5戦速で突っ込むぞ！」

「ようそろく第5戦速！」

ザツザアアアアアアアアアア!!!

2人の足元の海が掻き分けられ、白波を立てる。しらねは両肩の速射砲を、はたかぜは両手の速射砲をり級重巡洋艦がいる海域に向ける。

「彼我10000、主砲、撃ちいーかた始めえ!!」

「撃てえ!!」

ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！

次々に撃ち出されていく127mm砲弾。FCSを指向し、相手の未来位置を予測しながら撃ち込んで行く。

り級重巡洋艦も傾いてはいるが、負けじと8inch連装砲を撃ち返してくる。

「敵弾、前方800に着弾」

「当たらなければどうということはない……」

「お前はどこの赤い彗星だよ」

ヒュルルルル……

妖精さん……Σ(。D。;)

「……っ!?はたかぜ！面舵いっぱい！」

「了解！回避いい!!??」

ドドドドン……

「遠、近、夾又された!？」

「マジかよ……ん？増えてね？」

「え？」

はたかぜの言葉に表示されているレーダーを見ると、

対水上レーダー・光点6個。

対空レーダー・光点2個、そのうち一機が友軍。ぐるんぐるん回っている。

「ニンニンニン!?」

妖精さん：( #、△ ) ！?? 一 || || || ||

ロクマルに搭乗している妖精さんが74式車載7.62mm機関銃を深海棲艦機目掛けてぶっぱなす。

対空レーダーの光点が踊るように動いているのは、深海棲艦側の観測機とロクマルが激しい空中戦を行っているためである。

ヘリコプターの機動性を活かしつつ深海棲艦機を追い詰めていくロクマル。

ガガガガガガガガ……  
バババババババ……

両者ともに被弾するも、ロクマルは軍用ヘリ、相手側の深海棲艦機は複葉機と軍配はロクマルに上がっている。必死になつて機銃をロクマルに撃ち込むが、躲されるか被弾しても弾かれるかのどちらかだった。

妖精さん：(、ω—) ！?? 一 || || || ||

搭乗妖精さんは74式の発射速度を切り替え、じっくり狙いをつけてから引き金を絞る。撃ち出された7.62mm弾は光線を引きながら深海棲艦機へと吸い込まれていき、エンジンを破壊した。

クルクルと錐揉みしながら海へと落ちていく深海棲艦機。勝者であるロクマルも少なからずの損害を受け、黒煙を吹いていた。

「…っ…あぶない！」  
ドドドドドドド!!

妖精さん：(。D。≡。D。) !? (。▽。;) ……  
キュイイイイイイイ……

「ロクマル!? や、やばい!! 墜落する！」

「ンなあ!?! しらね! 対空レーダーに感あり! 航空母艦がいる模様、現在12機! なお現在増加中！」

「はあ!?!」

対空レーダーの画面に次々に増えていく光点。それら全てに『enemy』という表記が。

妖精さん：(、ω、) (、▽、;) (。ω、) ノ、

「妖精さああああん!?!?」

エンジンが破壊され、ゆつくりと回転しながら海面に衝突、白柱を立てて波間へと消えていった。

ぼしやり、と膝をつくしらね。その視線の先にはほっそりとした黒煙が上るだけ。

「あああ……」

「おいしらね! 敵航空機接近! その数60! って聞いているのか!?!」

「……」

「だアアもお! 状況を把握せんかゴルア!!」

「グハツ!?!」

「おい、確かにへりは落ちたが、あれだけ綺麗に着水してんだ。望みをもてよ」

思いつきりしらねの頭を127mm砲でぶっ叩き、正気に戻す。

「戦場において想定外のことが起こるのは当たり前! それらを加味した上での想定を常に頭の中で更新していく!」

「艦隊旗艦であるお前の仕事だろおがア!!」

「つ…ああもおうつとおしいんだよ!!」

分かってている。自分がすべき事。戦闘において私情を挟むのは敗北を望んでいるのと同じ。切り替えろ。

しらねは大きく深呼吸をすると、はたかぜを睨みつける。

「目標捕捉! 諸元更新完了! はたかぜ、殺れえ!!」

「諸元受信! ハープーンに転送、転送完了!」

「ハープーン5番から8番発射ア!!」

ドツ　ズバアアアアアア!!!

待っていましたと言わんばかりの速さで受信した諸元をミサイル1発1発に送り込む。そして素早く撃ち出した。

「ハープーン4発正常に作動! 目標到達まで80秒!」

「FCS切り替え。対空戦闘よーい!」

「対空戦闘よーい!」

「ここからははたかぜ、お前さんの仕事だ」

「任せろ。全機消してやる」

艦隊防空ははたかぜの仕事。ランチャーにSM1が装填され、敵航空機を指向する。

「つてー!!!」

残り少ない中距離ミサイルを次々に撃ち出し、撃墜していく。

ミサイルを恐れて低空を飛行し侵入してくる敵は、シースパローと速射砲、CIWSで蜂の巣にしていく。

「ハーブーン弾着10秒前!!」

「ぶっ飛ベクソツタレ!!」

ドオオオオオン!!!

増援に來た艦隊はル級戦艦flagship、ル級戦艦elite、ヲ級空母elite、ヌ級軽空母、イ級駆逐艦後期型2隻と主力打撃艦隊であり、たった4発のハーブーンでは絶対に殲滅など出来ない。それでも、撃ち込まれたハーブーンはヌ級、イ級を轟沈、ヲ級を中破まで追い込んだ。

「ハーブーン全弾命中! 敵駆逐艦、軽空母撃沈! 正規空母甲板大破!!」

「いよっしやあ!! どんどん行くぞゴラアア!!!」

迫り来る魚雷を避け、投下された爆弾をCIWSで迎撃し、シースパローを再装填、蚊を殺虫剤で落とすがごとくたたき落としていく。

妖精さん達もM2重機関銃や74式7.62mm機関銃を使って敵機を寄せつけない。

「撃ち続けるお!!!」

「しらね! 敵機直上! 急降下ああ!!!」

「チツ!! CIWS! AAオート!!」

ヴウオオオオオオオオ!!!

「落ちろおおおお!!!」

分間4000発の20mmタンクステン弾が吐き出され、空を埋め尽くしていく。

ドオオオオオオン!!!!

「うおおおお!!?」

250キロ爆弾1発と60キロ爆弾2発が直上で爆発する。それを投下した深海棲艦機は無数の20mmタンクステン弾を喰らい木っ端微塵に吹き飛んだ。

鎮妖精さん：、(、) ；、≡ / ； (、) /

弾幕が薄くなつたところを狙われ、輸送艦が狙われる。

「ヤバいつ!!間に合ええええ!!」

「しらねっ!」

通常、船ではできないような急旋回も艦娘ならば可能である。

しらねは海面を蹴っ飛ばし、輸送船に向かう。

「クソつたれええええ!!」

撃つ、撃つ撃つ撃つ!!!

ヴウオオオオオオオオ!!!

ドオン!ドオン!ドオン!

「あと1発!!!」

ヴウオオオオオオオオオオつ!!キユルルルルル……

「つーチイいいい!!!」

C I W Sの弾が尽きる。主砲も間に合わない。

ならばっ!!!

「おいっ!?!しらねっ!」

「すまんはたかぜ!あとは任せた!!」

「っ!?!ダメだっ!!それを喰らったら!!」

はたかぜの制止を無視して、しらねは突っ込む。

その戦場において、最悪の閃光が煌めく。

## 5話

「しらねええええ!!!!」

艀装から爆煙が上がる。深海棲艦機が投下した250キロ爆弾は後部煙突とヘリ格納庫との間に命中し、後部煙突を吹き飛ばし、ヘリ格納庫上にあるレドーム及びシースパローランチャーを破壊、ヘリ格納庫も原型を留めていない。

「しらねっ！しらねえええ!!」

ぐったりとしたしらねから返事は返ってこない。頭部からの流血、左肩から左肩腕にかけての裂傷。左側艦橋後部損傷。CIWS、左砲塔もへしやげ、射撃不能状態。機関も損傷しているのか、吹き上げる煙が目にしみる。

はたかぜが駆け寄り確認するが、吹き出る大量の血液は止まる気配を見せず、あともう少しすれば沈んでしまいそうだった。

しらね妖精さん：「(´ω、」∠)：「ゞ(・ω・；)ノ

「ああああああああ!!!!」

はたかぜの叫びが辺りに響く。応急処置をしようと、しらねの艀装の上や体に生き残った妖精さんたちが走り回る。

これ以上しらねを傷つけまいと、一心不乱に弾を撒き散らす。

ドズウウウウン……

「ぐうううう!!」

航空機の攻撃があらかた止むと、今度は戦艦の砲撃が始まる。

ハーブーンを既に撃ち尽くしたはたかぜが相手をするには荷が重すぎる。しかし、轟沈しかけているしらねと輸送艦を守らなければならない。

「クソつくそくそクソくそお!!!!」

ドオン！ドオン！ドオン！ドオン！

ドドドドドオオオオン…ドオオオオン…

ガギインツ!!

「くううううつ!!」

護衛艦に装甲などない。高角砲でも当たれば大破してしまう。

飛んできた砲弾は艦橋を掠り、後方の海面に着弾、水柱をあげる。必死になって撃ち返す。弾の交換などする暇などない。至近距離で爆発した対空砲弾はル級の対空兵装と観測機器を破壊することに成功する。

「今だっ！最大戦速!!!」  
ドオオオオ!!!

しらねを担ぎ、輸送艦を引っ張り海域からの脱出を図る。  
「っ!!!」

バリバリバリバリバリバリバリバリッ!!  
「またかっ!?どんだけいんだよ!!」

ガガガッ!!ガガガゴンッ!!  
「クソっ!!被害報告!!」

妖精さん：(、凸)ゝ、  
『射撃装置、電子機器その他の機器に損害なし』了解!!」  
ヒュウウウウウウウ……

妖精さん：(、凸)ノ||? ( ;凸)ノ

「CIWS!AAWオート!!!」

妖精さん：(、凸) ; ; ;凸)ノ( ;凸)ノ  
「なっ?!SM-1を撃ち切った!?!」

ランチャーから立ち上るのは、ロケットブースターの白煙のみ。  
艦隊ミサイル防空艦であるはたかぜの主力対空兵装はMk. 13 mod. 4のみ、あとは5インチ砲とCIWSだけだ。

妖精さん：(、凸)ω—?↑?— |— |— |— |—

妖精さん達がM2や74式にかじりつき、ぶっぱなす。使えるものはなんでも使う。中には64式小銃を撃っている者も居た。  
ドオン!ドオン!ドオン!ガンッ!カランカラン……

妖精さん：(、凸)ω ; ; ;凸)ノ  
「1番2番砲塔弾薬装填急げ!!!」

砲塔内部の最後の砲弾を撃ち、再装填にかかる。と言っても、既に主弾薬庫は底をつき、副弾薬庫も残りわずかとなった。

カートリッジ式の弾薬庫に妖精さん達が必死になって弾を込める。



妖精さん：A (>y<)、(?)、；、三ノ；、?)ノ  
「っ!!面舵いっぱい!!」

ヒユウウウウウウウ……  
ドオツドドオオオオオオオン!!!!

「うおりやああああ!!」

艦橋で上空を見張っていた妖精さんから、爆弾が投下されたことを知らされ、一気に舵を切る。

至近距離に250キロ爆弾などが炸裂、濁った海水をはたかぜに叩きつける。

「変針!取り舵いっぱい!!!」

ググググ……

しらねと輸送艦をしつかりと保持して曲がる。次々に投下される爆弾、魚雷、はるか先から降り注ぐ戦艦の砲弾を回避し続ける。

いくら護衛艦と言えども、限界は来る。

「はあっはあっ……雷爆同時攻撃かよっ!!」

左右上空から攻撃が来る。この短時間の間にはたかぜの能力を把握し、攻撃を仕掛けてきたところを見ると、彼らの母艦は相当頭が回るようだ。

妖精さん：(っ、ー、) ? 〓???? 「弾」

「ラストマガジン!!」

ガシヤツ!!

ドオン!ドオン!ドオン!ドオン!

ドンドムツドゴンドンドン……

だが雷爆同時攻撃をしようが、能力は護衛艦であるはたかぜの方が断然高い。最後の弾薬を1発1発を確実に当て、無駄弾を少なくする。

バリバリバリバリバリバリバリッ……

「うわあっ!?!」

カシヤン……ヒユウウウウウウウ

「!!」

ガゴツ……バシヤツ

機銃を撃たれ、バランスを崩したところを狙われる。急降下爆撃機編隊、雷撃機編隊の放った魚雷が迫る。

「避けられないっ!! 妖精さん! しらね! すまん!!」

鎮妖精さん：Σ(。D。;) (。△。)(。D。)

しらねと、輸送艦の手網を放り投げ、自分を弾道進路上に踊り出させる。

「主砲、目標魚雷! 砲撃開始! CIWS、AAWオート!!」

ドドンッ!! ドドンッ!! ドドンッ!!

ヴオオオオオオオオオオ!!!

ドムツドムツ!!

ドゴオオン!!

海面下で爆発した対空砲弾は水中を掻き回し、魚雷の進路を掻き乱し、暴発させる。

CIWSが放つ20mmタンクスステン曳光弾が空にビームのような線を描く。

「うおりやああああ!! 墜ちろおおお!!」

最後の砲弾が深海棲艦機に命中、粉々に吹き飛ばした。

妖精さん：(；；；。A。) ヅヤレ? L、...

『CIWS残り10%』!? ってもう撃ち切ったしっ!!」

ヒイイイイイイイイ...

「まだ居んのか...!!」

妖精さん：Σ(。D。;)

「なっ!? 逆からおっ!?」

対空レーダに新たな機影が映る。その数40。

「どれだけ戦力注ぎ込んでんだよ... たかが2隻だぞ?」

上空から急降下体制に入った爆撃機を見つつ呟く。

諦めかけたその時、レーダに映っていた40機の内十数機が速度を上げ、突っ込んできた。

ダダダダダダダダダダダダッ!!!

ダダダダダダダダダダダダダダダ!!!

ドンッ!!

「えっ?」

妖精さん:(。D。)

『所属不明の艦娘に次ぐ!!大丈夫か?』  
「は?」

白銀に塗装された機体に鮮やかに煌めく日の丸。最高時速500kmを超える第二次世界大戦前期「最強」と言われた戦闘機、『零式艦上戦闘機』が深海棲艦機に襲いかかる。

たった十数機の零戦は倍以上いる深海棲艦機に果敢に挑み、次々に墜していく。

急に現れた零戦にはたかぜは戸惑いつつ、返答する。

「こちらは日本国海上自衛隊所属、はたかぜ型護衛艦1番艦はたかぜ。僚艦にしらね型護衛艦1番艦しらね、しらねについては現在意識不明の重体。速やかな救援を求む!!」

『ん?カイジヨウジエイ:『何っ!?意識不明の重体だどっ!?了解した、そちらに駆逐艦2名を派遣する!!それまで持ち堪えてくれ!!』日向さん:無線被ってますよ:』

「救援感謝する!急いでくれ:!!」

無線交信をしている間にはたかぜの上空は制圧され、99式艦上爆撃機と97式艦上攻撃機が飛び越えて、深海棲艦に襲いかかる。

99式は上空から45度以上で敵艦に降下、97式は海面スレスレまで降下し雷撃体制に入る。

雷爆同時攻撃を反対にされ、避ける間もなくル級flagship、elite、大破したヲ級、リ級が撃沈される。

また、増援で近海に来ていたヌ級軽空母を旗艦とする艦隊も艦娘航空隊の攻撃により壊滅的ダメージを喰らっていた。

「……あつという間やん」

しらねのところに戻り、抱えて救援を待つ中、レーダと目視で見えていたが、如何に艦娘達の練度が高いか見せつけられた。

「おーい!大丈夫ですか?」

「つてやばい!!1人轟沈しかけてる!!」

「えええ!!?」

「きゅ、救援…？」

「そう！白露型1番艦白露！貴方達を助けに来たよ！！」

「同じく白露型2番艦時雨、もう大丈夫。安心して？」

鎮妖精さん：（？）（ゞ（・ω・、；）ノ

「はあっ……………」

バシヤツ：

「大丈夫!? って大丈夫じゃないか！」

「もう無理、動けない…我、弾薬ナシ…」

「どんだけ撃ったのさ…」

疲労がピークという言葉を遥か彼方に置いてきたはたかぜはもう燃料も少なく、心身ともに疲弊していた。

「こつちは任せて！時雨、その子を曳航してあげて」

「わかった。よいしょつと」

「……………ありがとう」

「いいよお礼なんて。僕ら艦娘は支え合ってなんぼでしょ？」

「……………」

「あれ？寝ちやった？」

俺、艦娘ちやうんやけど…とか思いつつ、安心感とアドレナリンで抑えられていた疲労がドツと来る。

猛烈な眠気に襲われたはたかぜは意識を手放すのだった。

「ねえ白露、この2人の武装って127mm2門だけなのかな？」

「うーん、そうだな。この子の艦装は大破してるから分かんないけど、もう一人の子は名取さんみたいな感じなんじゃない？」

「そうなのかな…」

巡洋艦クラスなのに単装砲2門だけで生き残れるのかな…？

若干の違和感を感じながら、白露と時雨はしらね達を連れ、鎮守府へと帰還した。

「…知らない天井だ」

起きたら、マジで知らない天井とおはようさんをした。

いやマジでここどこやねん。

「…とりあえず起きつつイッタアツ!」

「アカン! 左肩がつ!? 左腕がアツ!」

く裂傷の痛みには耐えること10分

「ハアツハアツ…し、死ぬるかとおもた…」

何とか薬品が入っている棚に到着し、鎮痛剤をがぶ飲み。

即効性が高いのか、すぐに効いた。

薬品棚がある所を見ると、医務室かなんかだろう。左腕を三角巾

(勝手に取った) で首から吊るし、歩いてドアを目指す。

「よいしよつと…おおなんだこの古い学校みたいな廊下は」

医務室と書かれたドアを抜け、廊下に出る。そこは木造の学校の校舎を彷彿させるような設計だった。

「うーん人気かねえ…どこに行けばいいのやら…」

第一営内班と書かれた部屋、娯楽室、洗濯室、調理室 e t c …

「営内みたいだな…」

てくてくと長い廊下を歩く。突き当たりにたどり着くと、階段があった。

「…下に行くかな」

ちようどこの階は建物の2階で、4階まであるらしい。とりあえ

ず、下に降りていく。ボケーツとしながら階段をおり、角を曲がる。つて青の壁？

「ムギユツ!?」ポヨーン

「キヤア!?」

ズダンツ!!

「ぎゃふんつ!!」

「だ、大丈夫ですか!?!」

「大丈夫だ問題な…い…」

「デカっ!?何がとは言わんけどデカっ!?っーか僕より背が高いっ!!  
誰だこの人!?!」

「あ、あのー?立てますか?」

「はっ!?ってえイツタア!?!何でまた痛くなんのおお!?!」

前かがみにつ!もつと破壊力増してませんか貴女!?!

てか何で鎮痛剤きれるの!?!短すぎない!?!

「アッアッアッアッ!?!とゴロンゴロン転がるしらねをどうやって助けようか迷う艦娘。」

「高雄くどうしたの?」

「ああちようどいい所に来たわ。愛宕、ちよつと手伝ってくれる?」

「えく?あ、この子、白露達が助けた子じゃない?」

「(;・・・)ナン…ダト!?!なんなんだこの人ら…姉妹艦つてどこか?服似てるし。てかどつちも…うん、おつきいです。」

「これで大丈夫かしら?」

「大丈夫?簡易的でしかないけど…」

「いえ、助かりました…」

リターン医務室。高雄型重巡洋艦1番艦『高雄』2番艦『愛宕』に

連れられて、戻ってきた。

「すみません。名を名乗っていませんでした。自分はしらね型護衛艦1番艦『しらね』と言います」

「高雄型1番艦高雄です。よろしくね?」

「同じく高雄型2番艦愛宕よろしくね」

「……」マジマジ

はたかぜ以外の艦娘を見たことがないしらねは、マジマジと高雄達を見る。

「あらあらどこを見てるのかしら?」

「っ?!いえっ?!なんでもありませんっ!!」

「変態さんですか……」

「いやほんとに! 僕自身他の艦娘を見るのは初めてでして……」

愛宕はあらうふふとしらねを見つめ、高雄は若干引いた感じに苦笑いする。何とか誤解を解こうとするが、既にしらねとはたかぜが”艦息”という事は知られており、またそのせいでこの鎮守府の提督が頭を抱えている。まあ、当の本人達はその事については知らないようだが。

「変態じゃないです……」メソメソ

「ん〜ちよつとからかいすぎちゃったかしら?」

高雄のジト目と愛宕のからかいにより、メンタルが大破寸前までロボロにされる。

ガチャ

「しらね〜起きてるって起きてるしなんか困ってるし」

「誰も困ってないわバカたぜ」

「あら? 貴方は……」

『『バカたぜ』って……あつ、どうも。はたかぜ型ミサイル護衛艦1番艦

『はたかぜ』です。そこで涙目になっているしらねの僚艦です』

「高雄です。よろしくね?」

「同じく愛宕です。よろしく〜」

ペこり、と2人に頭を下げるはたかぜ。いつもはこんな感じではな  
いはたかぜの様子に気味の悪さを感じるしらね。

「なあはたかぜ、お前本当にはたかぜ？」

「：頭いいくせにいつも奇行に走ってみんなを困らせた挙句全く謝りもせず色々仕出かしたしらね兄貴のことならよく知っているがどうしたくそバカしらね？」

「はいすみませんでした」

兄としての威厳？そんなもの生ゴミで燃えるゴミとして出したわ

!!!

「え、兄弟艦なの？でも艦名がぜんぜん…」

「いえ、ただしらね方が年上なのでそう呼んでいるだけです」

「なるほどね〜」タユン

愛宕が納得したように手を胸の前で打つ。

シ・ハ（なんなんだあの胸部装甲：モジュール装甲かなんかか？）

コンマ0.01秒、揺れる胸部装甲に目がいくが即座に逸らす。高雄はジト目になっていた。

「エツフン：あ、あとしらね、動ける？」

「ンンッ、動けるけどどした？」

「なんか、『提督』？ていう人が起きてたら執務室に来てくれって」

「あーなるなる了解。大丈夫、行けるぞ」

「すみません高雄さん愛宕さん。ちよつと行つてきます」

「助けて頂きありがとうございます」ペコリ

「いえいえ。あと、執務室までの行き方はわかりますか？」

「大丈夫です。把握しています」

「優秀ね〜」

左腕は頬にあてた右手右腕を支えるためになるだろうが、何故だか胸部装甲が強調される。

さすがに、そちらには目を向けなかった2人。

「では、失礼します」ペコリ

「失礼します」ペコリ

スタスタガチャツキイイバタン…

だけど即座に撤退して行った所から、ちよつと危なかったようだ。



「愛宕…」

「ん？何かしら高雄？」

「貴女、もうちよつと周りの目を気にしなさいよ…」  
「え？？」

今日も平運常転      b.y. はたかぜ

## 6話

く執務室く

コンコンコン

「どうぞく」

「入ります！」

「入ります！」

高雄達と別れたしらねとはたかぜは、はたかぜの案内の元、この鎮守府の総司令官、『提督』の元へと向かう。

すぐに到着し、ノックをして中に入る。

「よく眠れたかなしらね？はたかぜはさつきぶりだね。私は『提督』。名前はまあ、気にしないでくれ。こちらは秘書艦の『大淀』」

「よろしくお願いします」ペコリ

「りよ、了解です。申し遅れました、しらね型護衛艦1番艦『しらね』です。よろしくお願いします」

「うん。よろしく！まあ、座って座って」

「失礼します」

「失礼します」

「大淀、お茶4つお願い」

「分かりました」

入った瞬間に挨拶をされ、戸惑ったしらねだが、気を取り直して10度の敬礼をしつつ自己紹介を行う。提督に大淀と呼ばれた艦娘は給湯室と書かれた所に引っ込んでいった。

「しらね、身体の方は大丈夫かい？」

「あーっと、左腕以外は大丈夫です」

「そうか、なら良かった」

「あの時のしらね、死にかけだったもんね」

「心配かけたな、はたかぜ」

「…ま、生きてるから良いよ」

ちよつと照れた様子で言葉を返すはたかぜ。そんな2人をニコニコしながら提督が眺める。

「そうそう、はたかぜの言う通り、帰ってこれればまた行けるからね」  
「しらね、はたかぜ。君たち2人はこの鎮守府、『トラック泊地』の仮所属・保護扱いになっているんだけど、このまま正式に所属にしても大丈夫かな？希望の鎮守府があればそっちに連絡して行けるけど？」

提督からの提案にどうしようかと迷う2人。ドロップ艦は大体の場合、見つけた艦娘・鎮守府の所属になるのだが、稀に他の鎮守府を希望する艦娘があり、こういった感じで聞くように、提督に従事しているものには教育がなされる。

ちなみに、他の鎮守府を希望する艦娘は、『前の記憶』があるという。都市伝説みたいなものだが。

「どうするはたかぜ」

「リターンでしらねが決めてくれ」

「お前な…」

はあ、とため息をつくしらね。いつもの光景である。

「じゃ、決めるぞ？」

「おう。やっちゃえ」

吸うつと息を吸い、

「提督、護衛艦しらね、はたかぜは本日付けを持って、『トラック泊地』に着任することを希望します」

「こちらもそう望んでいたよ。これから宜しく、しらね、はたかぜ」

「はっ!!」

書類にサインをして、2人は日本国海軍トラック泊地司令部所属となった。

「さて、はたかぜから色々聞いたけど、もう一度本人から聞きたいから質問をしてもいいかな？」

「大丈夫です」

「ありがとう。まず、しらねは『対潜水艦特化型』なのかな？」

「そうですね…確かに対潜能力ははたかぜよりか高いですが、『特化型』という訳ではありません。ただ得意なだけです」

「なるほど…」

談話用のテーブルに置いてあったノートに何かを書き込む提督。

「対艦戦闘は？どうなの？」

「対艦戦闘については主に5インチ砲による射撃ですが、やろうと思えばアスロック・ランチャーにはたかぜのハーブーン対艦ミサイルを積むことが出来ます」

「君も撃てるのかい…」

苦笑いしながらノートを書く。若干やつれてるのは気のせいだろう。

「提督、お茶です」

「ああ、ありがとう大淀」

「お二人もどうぞ」

「ありがとうございます」

大淀から渡された緑茶で口を湿らせつつ、話を続ける。

「フウ、じゃあ続けるね。しらね、対空戦闘は？」

「対空戦闘は、ヘリ格納庫の上についているRIM-7シースパローミサイル、5インチ砲、CIWSで行います。はたかぜのように艦隊防空は出来ませんが、各個艦防空戦闘なら可能です」

「はたかぜのSM-1にも驚かされたけど、まさかしらねにもそんなものが付いていたなんて…」

現在、しらねの艦装は大破・修復不可能状態のため、本人からどんな装備なのか聞かなければ分からなかったのだ。

「…了解。はたかぜもいるし、これは伝えておこう」

「なんですか？伝えておくことって？」

それまで黙っていたはたかぜが口を開く。どうやら提督はしらねが起きるまでこのことについては黙っていたようだ。

「それがね…しらねの艦装もそうなんだけど、はたかぜの艦装も修復、補給が不可能なんだよ」

「…え？」

「お二人の艀装は、あまりにもオーバーテクノロジーで、補給が出来なかつたんです」

「ええええええええ!!?!」

大淀からの『補給が不可能』という事実を伝えられる。それは2人にとつては、戦闘はムリ、輸送任務をしようにも搭載スペースが無い、あつこれいらん子や、どないしょ? どうにもこうにも解体しかないやろ。あつ詰んだ。

ズウウウウン…

「……………」( T ω T )

「いやいやまだ希望はある! 二人とも! 開発をしてみないか!？」

「開発う???」

「とりあえず、『工廠』に移動しようか」

「ここが、『工廠』。艦娘の艀装や弾薬、燃料等を補給、修理するところだ」

「おおお…」

提督と大淀に連れられて来たところは、昔ながらの造船所みたいな所だった。

工廠内には妖精さんたちが走り回り、溶接したり、艀装にパイプを繋げて何かを補給していたり、聞きたくない何かを解体するような音が鳴り響く。

ナツカチャンダヨ  
アツチヨットマツテツテアツー!!!  
カーンカーンカーン

「私は何も聞いていない」

「あはははは…」

しらね、はたかぜに加えて大淀までもがハモって同じ台詞を吐いたことに、提督も苦笑いというか顔がひきつっていた。

「ゴホン、気を取り直してと。こっちだ二人とも」

提督に連れられて歩くと、何やら機械が見えてくる。

「これが、『開発装置』。艦娘の艤装を作る装置だ」

「これが…開発装置？」

「ただの箱にレバーとパイプが付いただけみたいな感じですけど」

『開発装置』名の通り『艦娘の艤装又は航空機等の消耗品を作り出す機械』だ。これによって作り出された兵装は、艤装にある『スロット』に入れることにより使用が可能になる。

「これを使って、君たち2人には開発をしてもらおう」

「ん？何故開発をするんです？僕達は補給できないんですよね？」

「そうだね、現時点は補給出来ない」

「?？」

「艦娘の補給はその装備に合わせて補給されるんです」

「……あつもしかして？」

大淀からのヒントに何か気がついたしらね。それに満足そうに頷く提督。はたかぜは全く理解していないようだ。

「そう、しらねが考えている通り、『装備に合わせて補給されるならその装備を作ってしまうばいい』ってこと」

「なるほど…」

「まずは、オール50で開発してみよう。妖精さん、頼んだ！」

妖精さん…(●)ω(◇)☆

ドドドドドドドドドドドド……

燃料、弾薬、鉄鋼、ボーキサイトのメーターが全て50を指す。

「それじゃ、しらね、やってみよう!!」

「えつと、このレバーを降ろせばいいんですか？」

「そうそう!」

「了解です!おりや!!」

ガッコンツ!!!

右腕でめいっばい下にレバーを下げると、重低音が工廠に鳴り響く。

ヴイイイイイイ……チーン!!

プシュッ

「さあ、何が出来た…?」

開発装置のドアが勝手に開き、中から虹色の光が漏れる。

「提督、どうやら『レア』のようです」

「そうだな。ちよつと楽しみだ」

やがて光がなくなり、中から兵装が出てくる。

「なんでこんな物が……」

「これは一体…?」

「しらね、はたかぜ。これは何だ?このハッチは？」

テツテテー『Mk. 41 model 8 VLS ★★★★★』

規則的に並んだハッチ。中にはESSMやSUMがのぞく。

出来たのは『Mk. 41 mod. 18 VLS』。西側のイージ

ス艦や駆逐艦、巡洋艦に積まれる垂直発射基だ。

『VLS、”Vertical Launching System

” 垂直発射装置と呼ばれる発射装置です」

「僕達が所属していた海上自衛隊の護衛艦艇のほとんどが搭載しています」

「全艦がか？」

「いえ、戦闘艦のみです」

「それでも凄まじいと思うが…」

呆気にとられる提督。”艦息”というイレギュラーに加えて”VLS”という謎兵器が出てきたことにより、胃の耐久値がマッハで無くなる。

「これは君たちにしか使えないってことか？」

「そうですね…しかし、今の僕達の装備では搭載不可能です」  
「そうか…」

考え込む提督。本当に考えているのかどうかはわからないが。若干左手の位置が胃の部分を抑えてるとかは気にしない。

「おいどうしたしらね、腹でも痛いのか？」

「……」

しらねも同じように下に俯き何やら考えている様子。こちらは腕を組んでいる為、胃が痛い訳では無いようだ。

少しすると、何かを決意したような顔で提督を見る。

「すみません、提督」

「どうしたしらね？」

「僕を改修させてはくれませんか？」

「何？」

まさかの改修の提案に戸惑う提督。確かに、しらねの艦装は大破しており、使い物にならない。いつその事、修復するよりかこのまま開発をして、使えるものに積み替えよう、ということである。

「確かに、最初の開発で『VLS』が出ているところを見ると改修出来なくもないが、ただ」

「ただ？」

「しらね、君の練度かどれくらいなのかによる」

改修、通常『改・改2』は艦娘の練度によって可能かどうか判断される。練度が低い状態で改になると、艦娘の体もそうだが、艦装もそれに耐えうる能力がない為、最悪の場合、解体になることがある。

提督はそれを危惧しているのだ。

「…練度、ですか」

シラネ妖精：(\*???) \* / (\* . ω . ( b ) \* . . ? .  
( ) ??

「あれ？お前らいつの間にな？」

シラネ妖精：( ? ) ∞ ? ( α ≧ ∇ ≦ ) α

『VLSの匂いに釣られてやってきた』？お前ら変態かよ…」



シラネ妖精：（\*、▽、\*）

いつの間にか居たしらねの妖精さん達。どうやらVLSの匂いに釣られてやってきたらしいのだが、どんな嗅覚をしているのかは不明だ。

SH妖精：I☒?・☒ノ

「おおーあの撃墜されたSH60Jの子達もいるじゃん」

SH妖精：（。・ω・）（ノ、・▽・）ノ

「おまつ!?生きてたのなら報告しろよオ…」ハアアアア

撃墜されたSH60Jの搭乗妖精さんたちも、付近の海域を漂っているところを発見、保護されていたのだった。

しらねと妖精さんが和気あいあいとしているところを見つつ、手元の報告資料をみて、頷く大淀。

「どうやら大丈夫なようですよ、提督」

「なんでだ大淀?」

「彼等は白露達が救援に来るまでの間、2人であの大艦隊の相手をして、壊滅状態まで追い込んでいます。唯のドロップ艦がそこまで戦えるとは思いません」

「また、あそこまで妖精さんと思疎通が取れ、信頼関係がしっかりと確立しています。これならば『改』になっても大丈夫だと私は思いますが?」

「……」

また同じように黙り込む提督。だが今度は早い段階で復帰する。

「よし、決めた」

「しらね。君の改修を許可しよう」

「っ！本当ですか!」

「ただし、条件がある」

「…なんででしょう」

「はたかぜ、君も改修すること。これが条件だ」

「俺もですか?」

「そうだ。しらねには対潜水艦特化型、はたかぜには対空戦闘特化型に改修してもらおう。そのための資材は用意する」

「ありがとうございます!!」

「了解です!では早速!!」

「あぁっと待って待って、もう少し開発してから行ってくれ」

「何故です?」

「戦力の増加、というものもあるが、私自身、君たちが作る兵装に興味がある。大淀、この2人に各資材700、与えてくれ」

「分かりました」

「では、頼んだよ。私は執務室に戻るよ」

「楽しみしといてください。提督」

しらねの言葉を背を向けながらも手で答える提督。秘書艦である大淀もそれについて行つた。

それを見届けると、早速開発に取り掛かる。

くはたかぜく

「おりゃ!!」

資材：鉄鋼250・弾薬：250・その他100

妖精さん：? (≡▽≡) /

『オート・メララ54口径127mm速射砲★★★★★★』

「ブフオwww」

2回目

「どっせーい!!」

資材：鉄鋼150・弾薬250・その他100

妖精さん：? (〃??〃)?

『ESSM (発展型シーパロー)★★★★★★』

「なんでこんなもんが出るんだよ!!?」

3回目

「ラストオ!!!」

資材：残り全部

妖精さん：(ゝqゝ三ゝpゝ)?\*。(▽。)

『ハーブーン対艦ミサイル★★★★★★』  
?!!!!!!!

「もう何も言うまい……」

「後でできそうなやつが予測できるぜ……」

くしらねく

「よいしょつとお!!」

資材：各250

妖精：(σ・▽・)σ

『SH60K★★★☆☆☆☆』

「誰だっ!!僕に潜水艦を殺しにかかっているって言った奴!!」

「誰だろうねー(棒)」

2回目

「セイツ☆」

資材：残り全部

妖精さん：?d。(。▽。d)

『SH60K★★★☆☆☆☆』

「まさかの二機目!?!?」

開発の結果、Mk.41 mod.18 VLS、オート・メララー54口径127mm速射砲、ESSM(発展型シースパローミサイル)、ハーブーン対艦ミサイル、SH60Kを開発。そのうち、Mk.41とSH60KとESSMをしらねに、オート・メララー54口径127mm速射砲をはたかぜに搭載し、余った73式54口径5インチ速射砲をしらねの破壊された5インチ砲と交換する。余ったハーブーン対艦ミサイルははたかぜのアスロクランチャーに搭載することになった。

早速工廠妖精さん達がトラック(妖精サイズ)に乗せて、どこかへと運んでいく。

開発資材もなくなったため、どうしようか悩んでいると、この工廠に住み着いている妖精さんから肩を叩かれる。

工廠妖精：σ(・π・\*)?(??三/?/

「そつちに行けばいいのか?」

「みたいだな。行くぞしらね」

「ホイホイ」

工廠妖精に連れられてやってきたのは、酸素カプセルみたいな装置

が置かれた一角。その装置の隣にはまだボロボロな状態のしらねの  
機装が置かれている。

工場妖精：「（・ω・）／／？（，ω）？／／／

「これが改装装置。中に入るとかくかくしかじかでパワーアップ!!  
』らしいよ、しらね」

「まるまるさんかくなるほどわからん」

「まあとりあえず入れてさ」

「へいへーい」

プシュー…ガコン

ウイイイイイ…ゴン バタン

改装装置が開き、工場妖精さんの誘導に従ってカプセル内に入る。  
と、同時に横に置いてあったしらねの機装がアームで釣り上げられ、  
カプセルの上部にある電子レンジみたいな装置に入れられる。

工場妖精：？d（。▽。d）Σd（^ω^d）Σd（。▽。d）

「おい待て最後のやつアツー！」

ゴオオオオドンドンドンギリギリセーフ!!!  
ガガガガあばばば  
ばばば!!!ギヤリギヤリギヤリギヤリイイイイ  
!!!!!!

チーン

「殺す気かあ!!!」

ドカーン!!!…ガコオン!!ガンツ!!ガランガラン…

工場妖精：（（…（；∩；）…（。>∩<（ω・（  
「うわあ!?何事!?!」

シユワちゃんもびっくりな登場の仕方をしたしらね。蹴り飛ばさ  
れたハッチは10mほど宙を舞い、大きな音を立てて落下した。

「なんだあれ!?マジで息出来ないしめちやくちや痛かったんだけど!？」

工場妖精：(ー、) ? ( ? ? ω ? ) ♪

『イレギュラーだから仕方ない』だつてさ」

「いやいやそれでも程かあるでしょ…」

しらねが文句を言っている間に、装置から艤装が取り出され、元の位置に置かれる。

艤装の形は、丸みを帯びていた艦橋、煙突がステレスを意識した形に変わっており、2本ある煙突が束ねられ、ガスタービンエンジンにすぐ変更できるように工夫されている。元々アスロック・ランチャーがあつた場所にはたかなみ型のように盛り上がったMk. 41 VLSが設置され、セル内にはESSMとSUMが装填されている。

マストはむらさめ型護衛艦のマストに酷似した物となり、電子機器類が以前よりも強力になっていることが分かる。

ちなみに、若干だが服装も変わっている。微々たるものでしかないので、割愛する。

「おおお…」

新しく生まれ変わった艤装に、思わず感嘆の声が零れる。工場妖精さん達も「やってやったぜ」とドヤ顔である。

工場妖精：? ( ☒ ? ☒ ) / ( . ω . ) / ( ? . . ? . . ) ?

／／／／

「おうーよろしく頼むよ!!」

しらねの生まれ変わった姿に感化されたはたかぜも、カプセルの中に入る。すぐさま艤装が装置に入れられ、ハッチが閉まる。

ウイイイイイイ…：…チーン

「おい待てなんで普通なんだよてゆうーかいつの間にハッチ直つてんだよ早すぎるだろ」

工場妖精：( . ∇ . ) /

シラネ妖精：(ー、) シラネ

同じように装置から取り出された艤装はもうほぼあきづき型護衛艦だつた。艦橋はもちろん、煙突、マストもステレスを意識した形に

変更されていた。

元々手持ちだった主砲が一門は手持ちのまま、もう一門はC I W Sと同じようにアームの先に取り付けられ、回転式だった3次元レーダが固定式のF C S 13に変更、同時対処可能数が2→3個から5→6個まで対処可能となった。

「なんか、もっとDDGぽくなったな」

「最初からDDGだ馬鹿野郎」

護衛艦しらね・はたかぜ、改修完了。

## 7話

東シナ海・海上

タンカー4隻・RO―RO船4隻・石炭輸送船2隻と護衛の艦娘、川内・神通・那珂・春雨・秋雲・巻雲の輸送艦隊はトラック泊地に向けて東シナ海を南下していた。

「な〜神通〜」

「なんですか姉さん？」

「暇なだけ〜」

「はあ、任務に集中してください。結構大きいんですからこの艦隊」

「え〜それよりもさ〜夜戦したい夜戦〜」

「暇なら那珂ちゃんが歌おうか!?」

「いや、結構です」

「ガーン!! 那珂ちゃんショック!!」

「那珂ちゃんも任務に集中して…全く」ハアアア…

右手で目を抑えつつ、盛大にため息をつく。マイペースな姉と、アイドルな妹を持つ神通。毎日お疲れ様です。

「なんで私この艦隊に組み込まれたんだろ…」

「それは秋雲さんにも分からないな。余ったからじゃない？」

「コラっ! 秋雲! 可哀想なこと言わない!!」

「そう言ったって、私達も余りじゃんか」

「そ、それは…否定できないけど…」

「(ゴ)によ(ゴ)によ」と言い淀む巻雲。確かに、彼女達が所属する鎮守府は現在大規模作戦に参加しており、ほとんどの主力艦が出払っているのだ。川内、神通、那珂も入居中で参加出来なかったため、こういった輸送任務についている。

「それにしても、なんにもないと反対に怖いなあ…」

「何も起きないことはいいい事なんだけどね…」

秋雲の眩きに反応する川内。ちなみに陣形は、前方にRO―RO船、石炭輸送船、タンカーで、護衛の艦娘は艦隊右前方を川内、左前

方を神通、右側面を秋雲、左側面を巻雲、後方を那珂と春雨が守っている。

静かな東シナ海の海原を、白波を立てながらもゆっくりと輸送艦隊は進んでいく。

「ひーまー!!」

「姉さん!!もう!」

ブオオオオオオオオ……

E-11トレーサー。っぽい深海棲艦機が機体上部についたレーダーで大規模な艦隊を捕える。すぐさま母艦にデータを送信、E-11トレーサーの母艦は隷下艦のノックス級フリゲート艦とペリー級フリゲート艦合わせて4隻を分離させ、攻撃を仕掛けるよう命令する。航空機で攻撃しない理由は、単に燃料弾薬ボーキサイトをバカ食いするためだ。

命令を受けた4隻は、速力を上げて艦隊から離脱。E-11トレーサーが監視する艦隊に接近する。

ノックス級とペリー級が搭載するハープーンは射程約120km。艦隊の規模を考えて彼我100kmまで接近する。



少し時間がたち、敵艦隊を搭載するH-2シースプライトが捕捉する。

情報を貰い、ペリー級はノックス級に全ハーブーンを撃つよう指示する。ノックス級はハーブーンを斉射するために各艦ごとアスロツク・ランチャーとハーブーン発射管を指向、射撃体制をとる。ペリー級は反撃を受けた時に備えてMk. 13にSM-1を装填する。

射撃体制完了の報告を受けたペリー級は、すぐさま射撃命令を出す。

ズドドドドドドドツ!!

シユウウウウウ：ドシュツ!!ドシュツ!!ドシュツ!!ドシュツ!!

発射管とアスロツク・ランチャーから発射された16発のハーブーンは、指定された方向へと飛翔する。

ゴオオオオオオオ!!

海面スレスレを飛び続ける16発の対艦ミサイル。対艦ミサイル本体はハーブーンそのものだが、色が明らかに違う。真っ黒な塗装に表面に走る赤い幾何学的模様、通った後には赤い軌跡が残る。

最初に気がついたのは川内。向かって右側から突っ込んでくると、言ってもシースキミングで飛翔するハーブーンは目視しづらい。

「な、なんだあれ?!」

「こつちに向かってくる!!」

「撃て撃て!!近ずけるな!!」

ドンドン、と高角砲を撃ちまくるが、見えない上に目標が早すぎるため、間に合わない。

ゴアアアアアアアア!!!

目標を目前にポップアップした対艦ミサイル群は、それぞれの輸送艦と艦娘に突っ込んでいく。

「間に合いません!!命中します!!」

「「「うわああああああああ!!?!」」」」

ミサイルが全弾命中したことを確認したトレーサーとシースプライトは、機首を180度旋回させ、トレーサーは哨戒に、シースプライトは母艦であるノックスとペリー級へと帰っていった。

#### 被害

沈没：タンカー・石炭輸送船。

大破・航行不能：RO―RO船・秋雲・卷雲・春雨

中破：川内・神通・那珂

死傷者・行方不明者：多数

生存者：艦娘6名、RO―RO船・石炭輸送船・タンカー船員合わせて13名

くしらね達がトラック泊地にたどり着いて4日目く

「『正体不明高速飛翔体による輸送艦隊壊滅事案』？」

「これ思いつきしハーブーンやね？」

「桜花つぽいけど…コクピットは見えないな…」

「じゃあエグゾセ？」

「有り得んだろ。こつちじゃ持つてる国すくねえし」

「てか対艦ミサイルどんだけ撃たれたんだよ、艀装がボロツボロだぞ？」

1時間ほど前、暇を与えられトラック泊地をブラブラしていたら、提督に呼び出され、執務室に入るや否この資料を渡される。

そこにはこちらに向かっていた輸送艦隊が壊滅した、しかも壊滅した理由が深海棲艦の新兵器によるものだという。護衛についていた艦娘からの証言と、撮られたブレックブレの写真を見て、対艦ミサイルによる攻撃だということが分かる。

「やはり、『対艦ミサイル』なのか？」

「そうみたいです…しかも『ハーブーン』だと思われまます」

「『ハーブーン』、君らが使っているやつか」

「はい」

ハーブーン対艦ミサイルを持っている国は数多い。エグゾセもそうだが、世界的に見てもこれが元になって発展、改良した対艦ミサイルは多い。

「はたかぜ、これに対抗する手段は？」

「俺達みたいに、分間40発撃てる砲＋VT信管付き対空砲弾、高性能なレーダー&処理システム、分間3500発の弾幕をはれる機関砲、射程10km以上の誘導弾があればなんとか」

「…ほ、他にはないのか？」

今のところ、唯一対艦ミサイルに対抗できるのはしらねとはたかぜのみ。そのため、多数の輸送艦隊を護衛することは出来ないし、今後しらね達のような艦が出てくる可能性は無いに等しい。イコール物資が届かなくなる、届きにくくなるということだ。それは、ここ『トラック泊地』の防御力が低下、最悪の場合深海棲艦に突破される可能性が高くなることを示す。

提督の額に脂汗がたらりと垂れる。

「あー、あと『チャフデイスフェンサー』があればもっと効果的ですね」「ちやふでいすふえ…なんだそれは？」

提督は新しくはたかぜから出た言葉に興味を持つ。

「俺たち護衛艦の最後の砦、CIWSと同じようなレベルで重要な役割を持つやつですよ」

「まあ、いわゆる『欺瞞紙』って言うやつです」

「欺瞞紙…あのアルミの束か？」

チャフデイスフェンサー、現代におけるミサイル回避に使われるアルミ箔やプラスチックのことを指す。

ミサイルは大まかに、テリア対空ミサイルやホーク対空ミサイルなど『セミアクティブ・レーダー・ホーミング方式』と、ハーブーンやA M R A A M、S S M 1 B など『アクティブ・レーダー・ホーミング方式』に分かれる。

SARHならば、母機や火器管制システムなどのイルミネーターにより誘導されるので、ECMなどの攻撃に強く、高い命中精度を期待できるが、常にレーダーが目標を補足しておかなければならず、戦闘機などの場合は発射後の機動に制限がかかり、また誘導数はイルミネーターの数に依存するため、飽和攻撃を受けると対処出来ない欠点がある。

ARRHはミサイル自身で探索、捕捉、攻撃を行うことが出来る。そのため、多数発射することが出来、複数目標に対して対処できるようになった。ただ、ARRHはミサイルにレーダーなどの精密機器を搭載しなければならなかったため、大型化する傾向にある。また、ミサイルがレーダーを自ら出して探索する為、ECMに対して弱い。そのた

め、ある程度の技術がなければ開発は不可能だが、現在はほとんどの国がARHを採用、発展させECM下においても正常に作動するような工夫をされている。(日本では88式、12式地対艦、90式、17式艦対艦など)

ちなみに、SM-2などは『慣性／指令誘導方式』、SARHとARHを合体させた誘導方式を使うため、イージスシステムによる同時多数目標攻撃能力を持つ事ができるようになった。

よーするに、ARH方式のハーブーンは『アルミ箔』で避けられるのだ。

「なるほど、それを撒けばハーブーンは避けられそうだな」

「と、思いがちですが、ハーブーンは時速約1040kmで飛んでくるので、タイミングがズレたらおじゃんです」

「……」イガキリキリ

「おいこらはたかぜ、提督が死にかけてるじゃねーか」

「俺のせいじゃねーよ、撃ったやつがわりーんだよ」

大丈夫ですか提督!?!と慌てて胃薬を持ってくる大淀。もはやこの光景が定着しつつあるのは気のせいではないだろう。

「提督は置いといて、このハーブーン誰が撃ったと思う?」

「うーん、俺的には『ペリー級フリゲート艦』か『ノックス級フリゲート艦』っポイ気がする」

「……理由は?」

「ここにさ、『回転翼機らしき航空機が水平線を飛んでいた』って書いてあるんだけどさ、これらしーんだわ」

とって、はたかぜがしらねに見せたのは米海軍が採用していた対潜ヘリコプター、『H-2シーズプライト』だった。

「おいおいマジかよ」

「さすがに俺らだけで相手するにやちと数が多いな」

「想定で、ペリーが2隻、ノックスが4隻いたら…」

「ハーブーンの数があぐいいな。ノックスだけでも32発飛んでくるぞ」

「対して僕のESSMが40発、はたかぜのSM-1が40発」

「ギリギリだな。ま、ペリーも8発しか積んでないだろ。流石にMk.13全部をハープーンにするわけが無い」

「…もしもだぞ？ペリーがフルで積んでたら、2隻で80発、4隻で32発」

「……アカン」

最悪の想定に体が震える2人。もしそうならば対処することは出来ない。

「もし交戦するなら、先制攻撃だな」

「激しく同意」

「しらね、ロクマル最大何機積める？」

「んゝ露天駐機すれば4機いけるぞ」

「2機編成のローテで哨戒しながら索敵だな」

「よし、それで行こう」

勝手に作戦を立てていく2人。その頃の提督は大淀に介抱されていた。

「しっかし、相手の航空機はヘリだけか？早期警戒機とかいるんじゃない？」

「ソウキケイカイキ…ナンダネソレハ？」

「提督っ!？」

「その可能性もあるな。はたかぜ、ECMは？」

「イーシーエム？ウツアタマガツ…」

「か、カタコトになってる…!!提督!しっかし!!」

「ある程度は誤魔化せるけど、多分すぐバレるぞ？何しろそこだけ電波が混線してんだからな」

「チツ、ECMはあまり使わない方がいいか。海図は？」

「この資料から察するに、島影はなさそうだな。絶好の索敵区域だ」

「はたかぜ、レーダーで警戒機を見つけたらECMをかける」

「りょーかい。それが打開策だな」

「うう…胃が痛い……」

「提督、しっかしっしらね達が今作戦会議中です！」

なんとか提督を励ますも結構胃に来ているのか、青を通りこして顔

の色が白くなっていた。

「……oh」

「こらあ、あかんヤツや」

「提督っ!? 提督ううう?!?!?」

ガクガクガクンガクンガクンガタガタゴキン

大淀が提督を揺さぶるが、もう既に逝ってしまっているようだ。

「大淀さん…取り敢えず御開にしません? 提督、このままだと死んじやうかもしれないんで」

「そ、そうですね…」

「あ、この片付けは俺らがやとくんで、大淀さんは提督をよろしく願います!!」

「わ、分かりました。よろしく願いますね」

はたかぜにここは任せて先に行け!!と言わんばかりに亡骸<sup>提督</sup>と大淀を執務室から出し、提督の私室へ行くように仕向ける。

その間にしらねがカップやら資料やらを片ずける。

「とりま、待機つてことで」

「了、じゃ解散しますく食堂行ってこよ〜」

「おいこら置いていくなはたかぜ! ボクも行く!」

「H A H A H A! 蒸気タービンの貴様が追いつけると思うなよ!」

「……はたかぜぬっクロス!!」

H A H A H A!!、とドップラー効果を起こしつつ逃げるはたかぜを追いかけるために執務室から飛びたして行くしらね。

本日も、鎮守府は平和です。(提督以外)

ちな食堂

「貴方達…うるさいですよ」

「すみませんでした…」

「いいですか? ここは食堂なんですよ? 暴れたりするところじゃないん

です。良いですか？だから――」  
ドタバタ走りながら来たため、鳳翔さんに怒られる2人がいたと  
か。（赤い暴食娘談）



## 8話

命令

大本営本部↓トラック泊地司令部

新型深海棲艦殲滅作戦

当作战ニ参加セヨ。

トラック泊地所属

特務駆逐艦

シラネ

ハタカゼ

二隻ニツイテハ、横須賀艦隊ト合流シダイ作戦ヲ開始セヨ。

「あの、提督」

「この『特務駆逐艦』とは…？」

「ああ、流石の上には『護衛艦』じゃ伝わらないと思ってな。武装も主砲は127mmだから『特務駆逐艦』にしたんだよ」

「なるほど…では、ボク達はこの作戦に参加すればいいのですか？」

「の、前にちよつとばかり記録を取りたい。上からの指示でもあるし、私も実際に君たちの戦闘力を見たい」

なるほどお…、と、納得する2人。実際、この2人の実力は未知数であり、救出した際も戦闘終了まじかだったということもあり、兵装、能力、対応力を測りたいのだ。

「ナルホドオ…」ニマア（???)

「お、お手柔らかに頼むぞ2人とも…？」

「場所が変わって演習海域」

「それじゃあしらねから、主砲射撃を行ってくれ」  
「了解です」

「艦装をつけて演習海域（と言っても港内）に降り立つ2人。

「艦装の形や性能はもはや原型を残しておらず、別物と言ってもいいほどである。」

「しらねは主砲である73式127mm速射砲を筏の上に立てられたいイ級を模した的に向ける。」

「目標、イ級！距離3500！主砲射撃よーい！」

「シラネ妖精：？（・ω・）／

「ってー！！」

「ドンッ！！」

「だんちやーく…今っ！！」

「ビシッ！！」

「……」

「あ……」

「……ん？」

「しらねの1番砲塔から放たれた127mm弾は、  
確実に的の端を捉え、海面に着弾した。」

「…えっと、しらね？」

「oh…いつもの癖が……」

「海自時代の名残でもある『的の端を狙う』射撃。お金が無いため、1  
個の的を大切に使うためにこういう撃ち方をするそう……。」

「しらね…今はもう海自じゃねえぜ……」

「分かってるって！！次弾発射ア!!!」ヤケクソ

ドンツ!!

ヒュルルルルル……

バスツ!!

「しゃあっ!!」

「次弾命中確認、諸元そのまま」

ドンツ!ドンツ!ドンツ!ドンツ!

「命中」

「即応弾撃ち終わり、射撃終了」

「全弾命中……か」

「恐ろしいほど精確ですね……」

しらねの射撃を見て絶句する提督と大淀。横で観測していたはたかぜはドヤ顔をして2人を見つめていた。

「次は、対空射撃なのだが……」

「まあ、得意分野にはたかぜ、お前の出番だろ?」

「仕方ないなあ〜やってやんよ〜」

はたかぜが前にでて、73式5インチ砲からオート・メラーラ127mm速射砲に換装された主砲を空へと向ける。

「今回の目標は10機、内5機をミサイルで、3機を主砲で、2機をCIWS?で迎撃して欲しい」

「りょーかいです」

固定されたFCS-3を起動し、対空目標を捜索・探知する。距離25000、イルミネータを指向して目標をロックする。

「目標1〜5番、SM-1で対処。6〜8番を主砲で対処、残りをCIWSで叩き落とす。OKか妖精さんズ?」

ハタカゼ妖精:(?・?・?)ゞ

「SM-1初弾装填!!」

ガシヤツ!

ハタカゼ妖精:(ー、ー)?

「発射ア!!」

轟、という音と共にロケットブースターが点火、凄まじい白煙を吐き出す。

初弾発射後、次弾が間髪入れずに装填され、目標空域に対し指向、同じく発射する。

「あのーしらね？はたかぜの姿が見えないんだけど…大丈夫なの？」

「大丈夫です。平常運転です」

「そ、そうなんだ……」

同じ作業を3回繰り返したはたかぜは、白の噴煙で見えなくなっていた。

最終弾を発射し終える頃、初弾のS M ー1が目標である無人の零戦を捕捉、勢いよく突っ込んでいく。

「初弾命中まで残り10秒：5、4、3、2、マークインターセプト！！」

「おお……」

水平線の上空で黒い爆煙が5つ連続的に発生する。それを見た提督と大淀が驚きの声を上げる。

「……最終弾命中を確認。次目標より主砲で対処！1番、2番砲塔指向！弾種V T！射撃よーい…撃ちい方はじめえ！！」

ドン！ドン！ドン！！

ヒュルルルルル……

ドンツドンツ……

V T信管が作動し、機体直前で爆発する。爆発した127mm弾はその破片をまき散らし、目標である零戦を木っ端微塵に吹き飛ばす。

「射撃速度とこの精度…尋常じゃありませんね…」

「ああ、これをほかの艦娘にも搭載出来たら…」

「多分、無理でしょうけど、搭載出来たらどれだけの艦娘が救われるか…」

既に思考が追いついていない二人を置いて、試験を続行するはたかぜ。次は最後の盾、C I W Sでの射撃である。

「目標、我に近づく不明機2機！！C I W Sにて対処！！C I W S、A A W

オート!!」

はたかぜの号令に従い、搭載された2基のCIWSがレーダーで目標を捕える。

目標までの距離を算出し、目標の進行方向を予測、未来位置に弾が到達するよう射角を弾き出す。

一瞬の内にこれらの計算を終えたCIWSは、射撃を開始する。  
ウインツ

キュルルルルルル

ヴアアアアアアアアアアツ!!!!

空に光線を描きながら飛翔した20mmタンクステン弾は、一瞬の内に零戦を蜂の巣にし、撃墜した。

「……」

「ていと…つて固まってるア」

「しゃーなし。だって毎分4000発だぞ?夢みたいなものだろ」

それから少しして、復活した提督と大淀興奮気味に2人に詰寄る。

「い、今のはなんだ!?対空機銃なのか!?!」

「あれほんとに機関砲ですか!?!明らかに発射音が異常でしたよね!?!」

「私らの中ではコレがふつーです」

「いやこれが普通で」

「なんなら30mmで毎分3000発近いやつもいます」

「」

「また固まったやんけしらね」

「知るか」

はたかぜから文句言われるけどコレについてちやーどしよーもねーだろ。つーかなんか工廠の方からピンク髪の人が全力で走ってきてるけどムシムシ。なんかあの人に捕まったら終わりの希ガス!!

「ねえはたかぜ?なんか工廠の方から全力疾走してきてる人がいるんだけど…」

「あれは…誰だ?ピンク髪の人:頭ピンク?」

「頭ピンクてお前:失礼だろはたかぜ」

「いや実際頭。ピンクやん」

「うんてかこの会話マジで脳死してね？」

「それな」

その脳死した会話の話題になってたピンク頭の方は海へとダイナミックダイブしてこつちに来てるんだけどね。目が血走ってるしな

んがすげー鼻息が荒いから余計に怖いんですけど。」「ちよおおあつとそこのおふたりさああああん?!?!?」

「あつやべつ助走つけすぎた」

「はたかぜがーど」 サツ

「えつちよしらつきやあああああ?!?!?」

ドンガラガツシヤーン…

「はたかぜR. I. P」

「し、死んどらんわクソが…」 ガクツ

ピンク頭の方が減速せずに突っ込んできたからはたかぜを犠牲に回避したんだけど…はたかぜ大丈夫かな? そういや排水量<sub>体</sub>トン<sub>差</sub>凄いなじゃねーのこれ…。

※明石：満載排水量11036<sub>ト</sub> はたかぜ：満載排水量590<sub>ト</sub>

「ああー! だだだだ大丈夫ですか!?!?! い、息してない!?! ちよつとー!?! 起きてくださいよー!?!」

「いやそんなにガクガクしたら」

「カヒュツ」 ( - - ? 、 )

「あつ」

「で？なんか言う事ありますか明石？」（ニツコリ）

「すみませんでした」

あれから、現実逃避から帰ってきた提督と大淀さんに手伝ってもらい、はたかぜを医務室へと緊急搬送。ピンク頭の人こと明石さんは現在進行形で執務室にて正座で大淀さんにぶち怒られています。

ちなみに提督とボクは巻き込まれたくないので、隅っこでこっそりお茶飲んでます。

「大体貴女はいつつもそうですよね？確かに、新しい技術や武器等に目がないことは重々知ってますけど、その度に自重するように行ってますよね？」（ニツコリ）

「いやもうおっしやる通りでございますです…」

「あところの子達の艦情報<sup>データ</sup>は先に送ってたはずですよ？どう考えても艦装を付けた状態では貴女の方が重いのですからね？分かりますよねそんなこと」（ニツコリ）

「はい…」

「今回のはたかぜさんの艦装にかかった資材の量、聞きます？ききますよねえ？」（ニツコリ）

「…ハイ」

「各資材1000近いんですよ？確かに中破くらいの損傷はしてましたよ…ええ。ですがはたかぜさんは駆逐艦なんですよ？しかも装甲なんて無いのですよ？なのに各資材1000近くもかかるんですよ？これがどういうことか分かってますよね？」（ニツコリ）

「モウシツカリト…」

「ましてや貴女は工作船、傷ついた艦装を治す側なのですよ？なんで派手にぶっ壊してるんですか？」（ニツコリ）

「申し訳ございませんでしたー!!! だからその笑顔をやめてよ大淀おおお…っ!!」

「大淀さんって…怒ったらああなんですか提督？」

「ああ。怖いだろ？うちの秘書艦」

「ですね……」

ズズズ…

「提督、この茶菓子美味しいですね」モグモグ

「だろ？本国から取り寄せたやつなんだよ。私の地元のヤツ」

「はえ〜こんなのもあるんですね〜」

「結構色んなもん取り寄せてるから今度来た時にでも出してやるよ」

「本当ですか、ありがとうございます」

よっしや甘味にありつける！なんか聞いた話じゃ甘味処『間宮』って言うところがあるらしいんだけど、まだこの基地の中歩き回ってないからどこに何があるか分からないだよな〜。

「あ、提督。自分そろそろ出ていっても大丈夫です？」

「お前はこの地獄を私一人で止めろと言うんだな？」

「……無理ツスね、了解ッス」

早く終わんねーかなこの地獄。

「そう言えばしらねさん？」（ニッコリ）

「ヒュッ!？」

「貴方、はたかぜさんを盾にしましたね？」（ニッコリ）

「ナ、ナンノコトカワカラナイナーデス…」

「貴方もこっちに来なさい。お説教です」（ニッコリ）

「ハイ…」

すっ、と明石さんにアイコンタクトを送る。

おいゴラア何見てんだ明石さんよお？元はと言えば貴女のせいでしょうがア？（ガン飛ばし）

ごめんね新人くん☆付き合っ☆（＼ω／）

ぶっ〇ころす

隠せてないよ新人くん…



ちな、提督はと言うと

「スーツ…今日も、平和だなあ……」  
現実逃避をしてました。まる。

くはたかぜ sideく

「……知らないことも無い天井だ」

何があつたんだっけ……

えつと確か港で実力試験をしてて、全部撃ち落として、んで提督たち  
ちが固まって……

「つてあんにやろおおおお!!!」

「クソしらねええ!!」

「今度会ったら全力で飛鳥文化アタックしてやる…っ!!」

つふう…叫んだらなんか逆に落ち着いたわ。やっぱ叫ぶのつてス  
トレス発散になるんだなー。

「いつつ…あのピンク頭の人絶対オレより体重重いだろ…あんな経験  
ねえぞ全く…」

「よっこいせ…傷は…ねえな。うん知ってた」

なんか傍らに『高速修復材』って書いてあるバケツが転がってるんだけど知らないつたら知らない。

「さて、とりあえず執務室に向かうか？ある程度場所わかるし、復活したってことも伝えなきゃ」

「えつと確か医務室を出て右に…」

ガラツ

「んで階段をおりて…」 テクテク

えーと、確かこつちに行ったら――

「えつ…？」

「ん？なんだ、見ない顔ね。どうしたの？」

「えつあつ…え？」

「えつと…大丈夫？どこか打ったの？」

「あつ…」

ぽんつ、と頭に置かれるその白い手袋に包まれた手。知っているその声。滅茶苦茶頑張って周回してドロップした…

「矢矧…」

「えつ？な、なんで私の名前を知ってるの？初対面よね？」

「……………っあ、いやなんでもないです」

もう薄れてきていた前世の人間としての記憶。画面の向こうにしか居なかつた存在が、今、目の前にいる。目の前にいるんだ。

「大丈夫？ってなんで泣いてるの!?ほんとに大丈夫!？」

「いや…ははは…」

嬉しい気持ちと、もう戻れないとここまで来ていたのだと思い知った気持ちがあつちやになつて、何が何だか分からない。分からないからこそ何故か涙が出る。分からない…分からないよ…。

「ちよつとーもう！能代姉え！能代姉えちよつと来て！」

「ああもうどうしたのよ矢矧…つてどうしたのよその子？」

「なんか私を見るなり泣き出しちゃつて…」

「ええ…その子初対面なの？」

「うん…。でも、こんな子見たことない」

「うーん、多分新しく来た子でしょ。とりあえず、食堂に連れていきま

しよ」

「了解。じゃ、行きましよう？」

※はたかぜの身長は150cm。両脇に身長160以上の阿賀野型。あとはモウワカルネ？